文學士武島羽衣著

美文韻文 霓裳微吟

博文館藏版

美文韻文

霓裳微吟

全

文學士武島羽衣著

文學士武島羽衣著

美文韻文 霓裳微吟

博文館藏版

美文韻文 霓裳微吟 全

文學士武島羽衣著

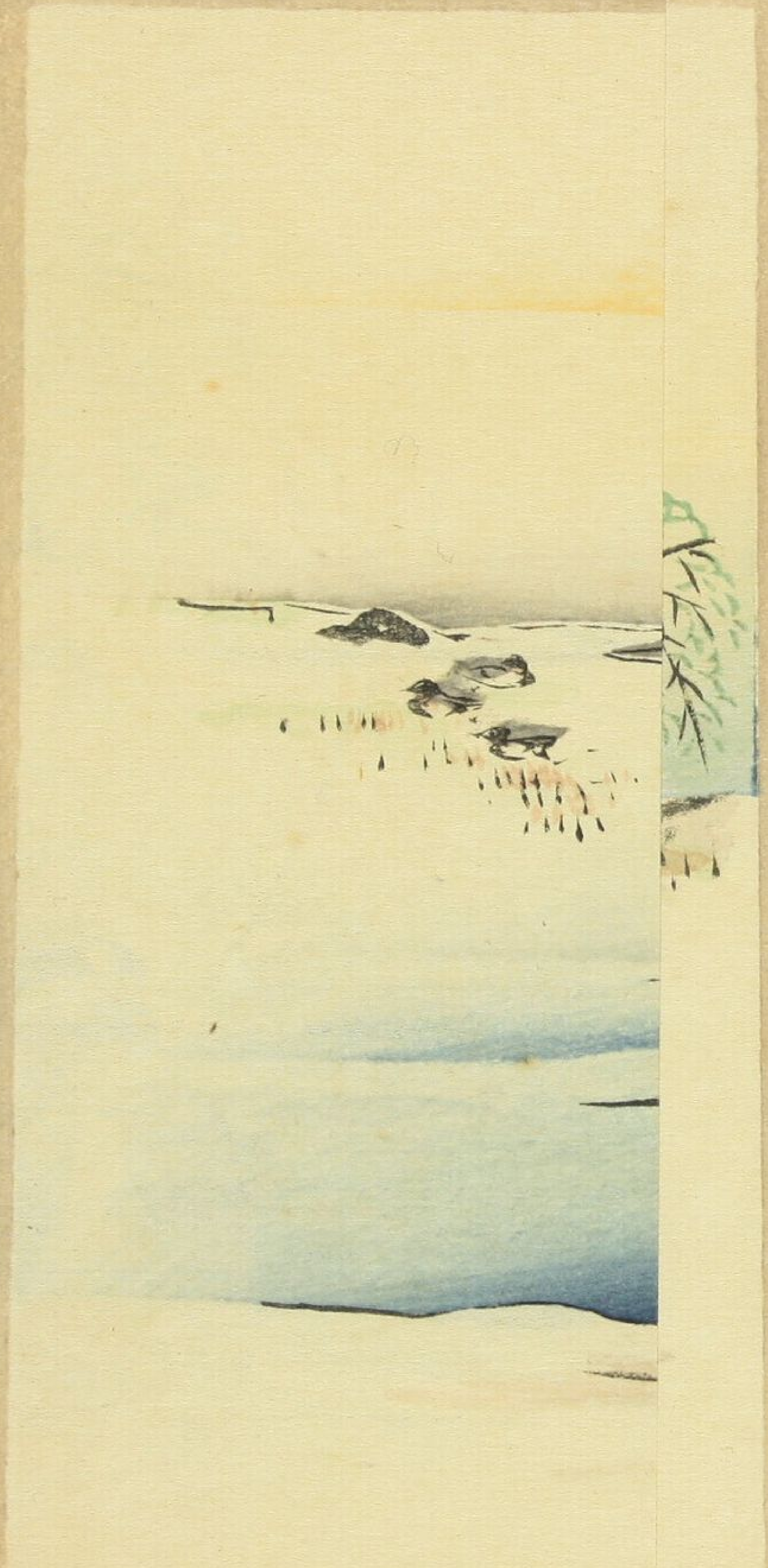
美文
韻文

霓裳微吟

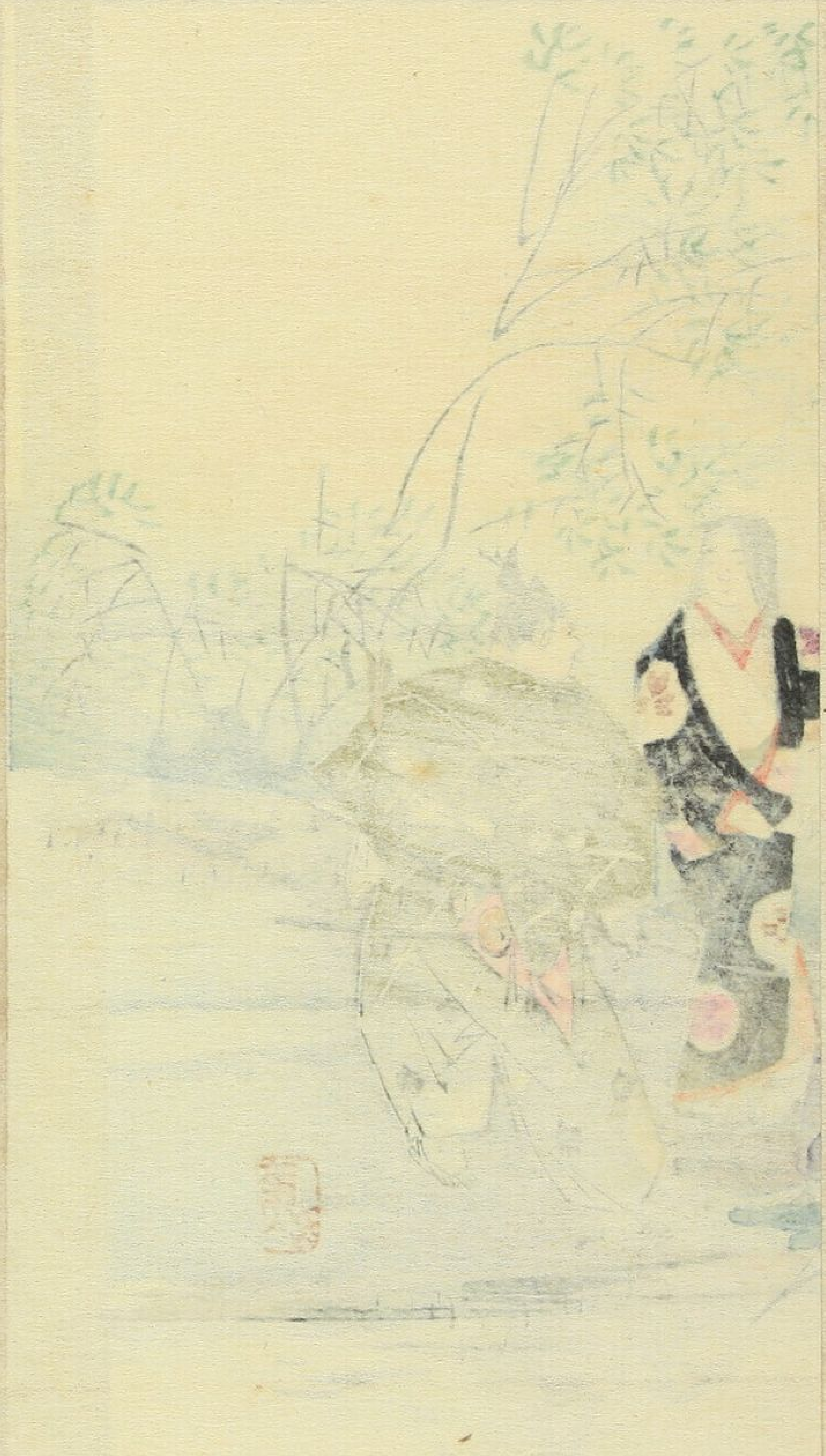
文學士武島羽衣著

霓裳微吟

博文館藏版



天つ御國におはします
わがちゝぎみはゝぎみに



序

歌を作るはなほ家を建つるが如し。割栗玉石にて地盤を固むるはこれ思想の根底をつくる也。柱を立て、棟をあげ土居葺をなすはこれ思想の梗概をつくる也。天井を張り、壁を塗り、鴨居と敷居とをとりつけて、玄關客間茶の間書齋などのわかれゆくは、句を組み、段をわかち、章をならべて、起承轉結のやう〳〵明になりゆくがごとけむ。長きを落し、荒木を削るはやがて言語の修飾也。水もりをなし、墨繩をうちて上下整齊分厘の差なからしむるはこれ歌の節奏諧調にあらずして何ぞや。同じく角なれども、土臺は柱となすべからず。同じく思想なれども、俳句に適せるものは、しひて短歌の思想となすべからず。同

じく普請なれども、長屋建はいづくまでも長屋だてならうむべし。長押づくりはまたいづくまでも長押づくりならしむべし。忽にして漢文調、忽にして國文調、忽にして卑語、忽にして雅語、かくの如きはこれ長押づくりの座敷に杉柱を用ゐ、長屋ずまひに欅の床板を用ゐると何ぞ異ならむや。あはれ歌を作るはなほざりごとにはあらずといふべし。

ことし、われ新に家を造りていさゝか作歌の術を得たり。いさゝか志るして序に代ふるになむ。

明治三十六年七月六日　小石川金鷄澗なる

霓裳書屋にて羽衣志るす。

霓裳微吟目次

秋風吟……一
人生……五
海嘯の歌……九
君を忘れん……一四
優美と崇高……一八
　新年雪……二三
　甥なるものゝいといわけなくてうせけるに……二七
　海樓晴望……三〇
　雲の音なひ……三五
　さゞれ水……四四

海邊曉望……四八
わが故郷……五三
牧兒の歌……五六
戀……六〇
涙……六一
鹽瀬ぶれ……六三
秋……七三
立春……七七
小夜砧……九三
魂まつり……一一五
をとめ塚……一二四
戀……一四二

江上送人……一四四
花の使……一四五
夏夕風……一四七
やまと琴……一五五
運命……一六〇
漁郙……一六二
春の浦づと……一七〇
夕つゞ……一七三
里川……一七七
盲女のうた……一八六
戀のをとめ……一九〇
縣居大人の御墓にまうでゝ……一九九

詩人の像に題す……二〇五
人丸赤人　バイロン　業平貫之　李青蓮
紫式部　清少納言　ゲーテ　西行定家　杜少陵
長明兼好　テニズン　芭蕉　巣林子　白香山
眞淵千蔭　ロングフェロー　蘆庵景樹　ユーゴー
折にふれて……二二四
墨そめ櫻……二二七
龍華寺の富士……二五四
涙かけ衣……二六八
思ひいで草……二七七
煤はらひ……二八五
早春の詞……二九一

逗子の春色……二九九
旅のなぐさ……三一〇
續都の手ぶり……三一七
新橋停車場　日本橋　歌舞伎座
淺草の里

美文韻文
霓裳微吟

文學士　武島羽衣著

秋風吟

あしたの荻に立ちそめて、
夕べは松にやどりつゝ、
軒端はなれぬわが宿の、
心の友の秋風よ。

なれがさやぎのかなしきは、
　鴈のなみだのやどればか。
汝がおとづれのさびしきは、
　桐の一葉をさそへばか。

なれがけはひの露けきは
　しぐれの雲にまじればか。
汝がとゞろきの身にしむは
　露のしげみをわたればか。

「いな〳〵否かばかりに、
　おのがさやぎの悲しきは、
すぎしむかしのたのしさを、
　打かへしつゝかたればぞ。

いな〳〵あらずかばかりに、
　わがおとづれのさびしきは、
君が心の戀の緒を、
　おのがゆの手に引けばなり。

いな〳〵あらずかばかりに、
おのがけはひの露けきは、
はかなくうせし人々を、
また面影にたつればぞ。
いな〳〵あらずかばかりに、
わがとゞろきの身にしむは、
君が胸にしむすぼるゝ
なげきの霧をふけばなり。」

人生

........................Sans flambeau

Cette epoque en travail, fossoyeur ou nourrice,
Qui prepare une creche ou qui creuse un tombeau!

——Hugo.

春をのせくる鶯の
聲のあやをもおりそへて、
にしきと見ゆる山のべの
さかりの花のしたかげに。

みどりのたもとふりはへて、
おひさきこもるをとめ子の
こゝろそらなる絲遊に、
あくがれつゝもあそびゐる。

いくその年のめぐるまに、
山は霞のきぬ更へて、
木々の梢もみづえさす、
夏のはじめとなりし時、

をとめもいつかさだすぎて、
やうだいけはひおもりかに、
みどり子さへも打負ひて
またもとひきぬ木のもとに。

ふたゝび年はめぐりつゝ、
はゝその紅葉うつろひて、
あとゝふ風のおとすごく、
かなしき秋となりぬれど、

をとめのすがた見えもせで、
今きづかれしおくつきの
そとばのかげにわらは子の、
をりをり來泣くばかりなり。

なほとゞまらぬ年なみに、
とはれし枝もとふ風も、
雪にうもれてさびしさの、
はてなき冬となりぬれば、

人めも草もかれはてゝ、
あれのみまさるおくつきに。
只さゞやけき新墓の、
打そへられてのこりけり。

海嘯の歌

五月雨は降止めど、
晴れもせぬ夏の空。
いとゞしくかきくれて、
海もせにおほひくる

黒雲のたゝずまひ、
　いみしくもあやしきに
俄かに沖つしほさゐの、
　底にとゞろくものゝおと。
夕立つくもに時えつゝ、
　鳴(なる)いかづちのこゝちして
何のひゞきとひと〴〵の、
　たどりもあへぬそのほどに
いかにかしけん大海神(おほわだつみ)の、
　いかれるすがたいともすごく、

諸手に驅るや大荒浪(おほあらなみ)を、
　そら衝(つ)くばかりうづまき高(たか)め、
木の葉と見ゆる磯べの家を、
　千ひろのしたに打しづめつゝ、
きほひゆくその勢のいみじさは、
　あめつちも今碎けなんばかりなり。
逃れていづるひまもなく家は忽ちくつがへり、
　なかにすみぬる人々のさながら死ぬるものもあり。
うちながれくる岩かどにかしらはくだけ手は折れて、
　走(はし)る血しほにまみれつゝ浪間にくるふものもあり。

岡にそびゆる松がえにおのがいのちはつなげども、
浪に消えゆく妻や子を見て救ひえぬものもあり。
息の緒に助けをよべる叫喚の、
をちこちにいとものすごくあるほどに、
また吼えきたる大なみ小なみ、
海をひとつによせあつめけん
前にもまさるそのいみじさは、
千引の岩を打まろばして
野山ともなくもゝ重につゝみ、
幾村々をまた引きゆけば、

のがれし人も溺れつゝ、
傷負ひしものは息絶えて、
いくその村にひとりだに、
生きたるものもなかるらん、
救ひをよべるこゑ〳〵も、
今はあとなく消えはてゝ。
やう〳〵にかへりゆく、
大浪のあとべには、
榮えにし村里の、
人すまぬ荒野らと

時のまになりはてし、
ものゝみぞのこりける。

君を忘れん

ひるはしみらにたれこめて、
　消えぬ思ひにこがれつゝ、
よるはすがらにおもひねの、
　夢の直路(たゞち)に君をまつ。

かはらぬ契り祈るとて、
　幾夜わたりし貴船川。
君安かれとあめつちの、
　神たのみしもいくそたび。

心にあとはなけれども、
　おくる思ひは絶えまなく、
君と住みなん行末の、
　おもかげのみぞ書かるゝ。

あゝかばかりの心をも、
　なほ忘るとし君いはゞ、
いで〱われはうれしくぞ、
　君をわすれんとことはに。

君わすれんか野づかさの、
　鳥は今より聲たてじ
君わすれんかあらたまの、
　年は今よりめぐりこじ。

海のあせなんをりあらば、
　君をわするゝ時もこん。
山のさけなんをりあらば。
　君をわするゝ時もこん。

君がいにしへたはむれし、
　たのしき野べをわすれてよ
君がいにしへむつびてし、
　したしき友をわすれてよ。

又いにしへのたらちねの、
尊きかげをわすれてよ。
こをだにえせばいでわれも、
君をわすれんとことはに。

優美と崇高

かぎりなくきはみなき「美」の國に、
たぐひなきはらからは生れけり。

兄はをゝしくいかめしく、
あやしきまでに猛(たけ)びつゝ、
只かりそめの身じろきも、
地(つち)をゆるがす勢ひは、
聞きのかしこく見(み)のたけく、
心ぎもさへきえはてゝ、
いみじきものゝためしなる
虎狼もひそむべし。

妹はけはひたをやぎて、
　さまなごやかになつかしく、
ふくと志もなき大空の、
　風にも堪へぬさまながら、
匂ひきよらにこまやけく、
　てりかゞやけるすがたには
情をしらぬ岩木まで、
　心よせぬはあらざらん。

かゝるまに幾度も年の矢は、
永久（イターニテー）の的さしてとびゆきぬ。

山を拔きなん力にも、
　老のながれはせきあへず。
兄はやう〳〵老いゆきて、
　はてはあへなく身まかりぬ。

しかも怒れるそのまなこ、
　ありしがまゝにものすごく

あけをそゝげるかほばせも、
さながら生ける如くにて。
さるをいもとはいかばかり、
くすしき力もつならん。
花のくちびる月のまゆ、
面(おも)がはりせずにほひつゝ、
打なびけたる黒かみに、
人の心をつなぎとめ

幾ちとせへし今までも、
常少女(とこをとめ)にてさかゆなり。

新年雪

ふりかくせふりかくせ、
はかなく過ぎしこぞの世を、
われをとめこし老いらくを、
年のいそぎにたちまひし、
都大路のちりひぢを。

色にでよ、
けふたつ春ののどけさを、
さかゆく御代のめでたさを、
まだきに志るき豐年の、
小田の足穗のゆたけさを。

ふりかくせふりかくせ、
人の心のきたなさを、
わが戀びとのつれなさを、
世の人みなの願ふなる、

こがねと名とのけがしさを。

色にでよ色にでよ。
君がめぐみのうれしさを、
神のみいつのくまなさを、
國をことほぐ歌びとが、
塵ゐぬ胸のさやけさを。

ふりかくせふりかくせ。
身を苦むるうきふしを、

世のいとなみのせはしさを、
弱きは強きが肉となる、
虎狼のあらそひを。

色にでよ色にでよ。
わがくにたみの眞こゝろを、
少女（をとめ）がむねの罪なさを、
まことの人のたもつべき、
徳と戀とのかゞやきを。

甥なるものゝいといわけ
なくてうせけるに

しづかにねむれいざ我子（あこ）よ、
夢なきつひのとこのへに。
なれがゑまひを見んために、
手折りし花を身にそへて。

玉ともみゆる汝（な）がさまの
きはゝなれたるけだかさに、

天にますなる神々も、
　ふかくめでさせたまひけん。

塵にまじらぬなれが身の、
　世のうきふしにあはぬまに、
けがれにそまぬ汝が胸の、
　世の罪しらぬほどにとて、
かをりみちてもふりまがふ、
　千草の花の常世べに、

かしこきうづのみ手づから、
　なれをみちびきたまふなり。

誰しの人か世のなかに
　死なぬためにや生るべき。
世にすむうさも死ぬためと、
　誰かはしらで誰かしる。

しかあるものを只ひとり、
　この世の闇をよそにみて、

神の國よりまたさらに、
　神の國へとうつりゆく、
なれはげにこそあめつちの、
　幸（さち）あるものゝかきりなれ。
なれはげにこそあめつちの、
　幸あるものゝきはみなれ。

海樓晴望

軒端になびく鹽けむり、

　おばしまによるあまをぶね、
波まに引ける伊豆のねの、
　みどり眉もとりそへて、
生きたる書圖のをかしさを、
　いかゞうつさん言の葉に。
昇る朝日の影させば、
　五百重の霧もひらけつゝ、
みなわさかまく潮さゐに、
　躍りて出づるくらおかみ。

あゝこれ高きこのやどの、
　あさのながめにあらざるか。
はゆる入日の夕ばえに、
　こがね花さく波のうへ、
聲よびつれてあまぶねは、
　わが觀る袖にかへるなり。
あゝこれ高きこのやどの、
　夕べのさまにあらざるか。

もしそれ早きしほ風の、
　海を斷ちつゝくる時は
あめつち黑く雲わきて、
　みそらを洗ふ沖つなみ。
ながつみ叫び魂泣きて、
　うらかなしさをいかゞせむ。
もしそれ清きにひづきの、
　嵐にさえて照る時は
千里のをちに雲消えて、

　はてなく氷るわだの原
浪にきほひて中空に、
　うきたつ心なにとせむ。
旅のまくらに只ひとり、
　見るもかひなきこのやどの
をしきながめを思ふにも、
　あゝなき父のましまさば
あゝなき母のましまさば、
　あゝ戀びとのあらませば。

雲の音なひ

雲の眞袖もかをるまで、
　花ちる空のやちまたに
「老」と「病」と「死」と三人、
　うたげのむしろ張りにけり。
天つをとめがかぎりなく、
　心つくせるもてなしに
とくめぐりゆくさかづきの

数かさなりしそのきざみ、
かしらの髪も白河の、
みづはぐみたる「老らく」は
もろ手を高くさしのべて、
ゑひのすゝみにいひけらく、
「あはれ友どちきゝねかし、
この世の中にわればかり
勢ひたけくいかめしく、

恐(かしこ)きものはあらざらん、
花なす子らもますらをも、
ひとたびおのが手に觸れば
腰かゞまりて足なえて、
見しにもあらずなりぬべし。」
「否」とひと聲打さけび、
そびゆる肩をいからせて、
「病」はこなた見おこする、

　まみのひかりのするどさよ。
「やよ老らくよいかでかは、
　さることわりのあるべきや。
世をなびけたるつはものも、
　われにはかたぬさま見ても、
生きとし生ける物みなは、
　草のかき葉にいたるまで。
もれなくわれにしたがへる、

　やつこなれとはさとれかし。」
こを聞きゐたる「死」はやをら、
　おもてにゑみをふくみつゝ、
「あなかしがましわが友よ、
　さる言あげはせずもあれ。
「老」も「病」も「死」なからば、
　いかでか世にはありふべき。
世の人なれを恐るゝも、

「死」あるがためとしらざるか。
そこし思へばわれをこそ、
うへなき王（きみ）といふべけれ。」
いふなるけはひほこりかに、
八束の髪をなでゝけり。

* * * * *

かくてつきせぬあらそひに、
世の品定めきかんとて、
三人は雲をかきわけて、

大地はるかにくだりゆく。
やがても天降（あも）る高峯の、
あらしの風にたぐひつゝ。
ゆくやふもとの道のべに、
形ばかりなるいほりあり。
ねやのひまより見入るれば、
老さらぼひしやみ人の
いでいる息もたえ〴〵に、

ひとりごちつゝいひけらく。

「老よ病よ死よ來れ、
　われはおそれじつゆ汝(なれ)を。
只玉ゆらも早くきて、
　天つみ國のしるべせよ。
まことやなれは大神の、
　高しらしたる天國と、
この罪多きうつし世の、
　中のへだての門守よ。
われ人みなのむくろこそ、
　なれが心のまゝになれ。
わがひそめたる魂のみは、
　いかで汝(な)か手にまかすべき。
いざ〱きたれいざきたれ、
　われはおそれじつゆなれを。
只玉ゆらも早くきて、

天つ御國のしるべせよ。」

さゞれ水

見るかぎりはてもなき、
大空とひとつなる
草ばらをよこぎりて、
ながれたるしみづあり。

わかれゆく横雲に、
茜さすあしたには、

てりそむる朝日子と、
むつまじくかたりつゝ、

たゝなはる遠山の、
うすれゆく夕べには、

影みゆる夕月と、
へだてなくむつれつゝ、

ひかりなき闇の夜も、
てる星のなぐさめに、

おもしろきねをたてゝ、
　時のうたうたひつゝ、
くれぬまも明けぬまも、
　雨の夜も雪の日も、
ひたすらにいそしみて、
　み空へとのぼるなり。

とことはになかるれど、
　志かもなほたゆみなく、

とことはにのぞめども、
　志かもなほ足らひつゝ、

とことはにかはれども、
　とことはにかはりなく、
とことはに動けども、
　とことはに休むなり。

げにや世のかゞみとも、
　かゞやけるさゞれ水。

人みなのこゝろをも、
　なれがごとあらしめよ。
清らかにたのしげに、
　たゆみなくかはりなく、
すゝみつゝのぼりつゝ、
　なれがごとあらしめよ。

海邊曉望

星かげうとき磯山の、

　松のひまよりながむれば、
見渡すかぎりをぐらくて、
　海とは霧の名なりけり。
さゝやくごとき浪の聲、
　こたふるごとき磯の音。
相ことゝふはあけぬまの、
　よるの契りやかたるらむ。
かくあるほどにひんがしの、

山やう〳〵に明けゆけば、
けぢめわかれていつのまに、
浪はみどりとなりにけむ。

鏡とすめる朝なぎに、
今しも汐はのぼりつゝ、
をぶねの木の葉あともなく、
あさぎよめせる浪の上。

前(さき)追ふ風を走らせて、

紫雲の御座(おまし)よそひつゝ、
ゑみかたまけて出でますは、
あはれ光りのおほぎみぞ。

海中(わたなか)斷てる一筋の、
こがねの道をあゆみつゝ、
このあめつちの物みなに、
めぐみをわかつたふとさよ。

むれつゝ翔(かけ)る浦鳥は、

もゝよろこびを歌ふなり、
躍りてくるふ岩浪は、
　白ゆふ花をさゝぐなり。
沖をめぐれる遠山も、
　ゑまひの色を放ちつゝ、
みどりしたゝる四方の野べ、
　なさけの露にむせぶなり。

わが故郷

馴れし山べのあるところ、
めでにし花のさくところ、
ふりわけがみをうつしこし、
門の筒井のわくところ、
あゝこれおのがふるさとか。

むつれし鳥のなくところ、
へだてぬ友のすむところ、
笹ぶねうけし夕川の、
清き苔ぢのむすところ、

あゝこれおのがふるさとか。

山かは何ぞあめつちを、
こむるこゝろにくらぶれば、
只つゆほどのものなるを、
まことの人のふるさとは、
などさばかりに限られむ。

花鳥なにぞ。きはみなく、
ながるゝ年にくらぶれば、

只時のまの友どちを。
まことの人のふるさとは、
などさばかりにかぎられむ。

神のいぶきのふくところ、
清けき戀の滿つところ、
こがねと名とをへだてつゝ、
浮世のちりのこぬところ、
あゝこれおのがふるさとぞ。

「徳」のひかりのさすところ、
「誠」の道のあるところ、
百千の心やはらぐる、
「美」のかゞやきのてるところ、
あゝこれおのがふるさとぞ。

牧兒の歌

野ぢの夕川月さえて、
ま玉をそゝぐさゞれなみ。

渡る小牛の脊にのりて、
ゆくはいづくの賤ならむ。
あはれをあそふ夕ぐれに、
うちながめつゝうそぶけは、
ゆくへいそがぬ小うしまで、
心ありけるあゆみかな。
雲わく峰にのぼりては、
嵐に笛をすさびつゝ、
花さく野べにまじりては、
小鳥とゝもにうたふなり。

あしたに出づる友とては、
　只この牛とこのをぶゑ。
ゆふべにかへる友とても、
　またこの牛とこのをぶゑ。
塵のちまたをふまざれは、
　けがれだにせぬ雙の足。
こがねと名とを逐はざれば、
　くもりもあらぬおのが胸。
すげの笠に雨すぎて、
　折らぬに月はかゝれるを、

桂懸けんと世の人は、
　いづくの空にさわぐらむ。
谷まのいづみおりたちて、
　むすべは甘き水のあぢ。
百のこかねに世の人の、
　替ふてふ酒もなにかせん。
けはひなまめく柳かげ、
　よし浮れ男は醉はゞ醉へ。
われはこの春をすみかにて、
　心のまゝに世を過ぎむ。

戀

木々の雫も末遂に、
　同じ清水におつるなり。
蜘手にたぎつ山がはも、
　流れ逢ふ瀬のなくてやは。
下もえわたる小草には、
　つれなき雪も解くとかや。
人めしのぶの浦にだに、
　そこのみるめはありてふを。
などてか我は世の中の、
　ためしにもれて只獨り、
雲井の雁のよそにのみ、
　花を見つゝもすごすらん。

涙

けふや限りとふるさとを、

雲井のよそにはなれつゝ、
ゆくへさだめぬ別れ路に、
先立つものやこれならん。
玉のうてなにひきかへて、
つゞれかたしくわび人が
昔をしのぶ袖のうへ、
したゝる露やこれならむ。
命すてゝしますらをが、
今はのきはのひとしぐれ。
君につくせるまごゝろの、

しるしとなるやこれならむ。
つれなき人をまちわびて、
心しほるゝ小女子が
ところせげなる袂には、
戀の雫とかゝるらむ。

鹽瀬ぶね

「やよ渡り守すみやかに、
ふなでの準備（いそぎ）とゝのへよ。

わがいふまゝに漕ぎいでば、
　あまたのこがねえさすべし。」
さまきよげなる若びとは、
　あはたゞしげにかくいひぬ。

「浪風あらきこの夜半に、
　ふなでせよとは誰なるぞ。」
いぶかしみつゝふなびとの、
　とへることばを打きゝて、
「われはものゝふまた此女は、

　此國なる守のむすめなり。

かたみにつまとよばれつゝ、
　心のまことかはしゝが、
うきなはもれてちゝぎみの、
　いかりなだむるよしもなく。
すみしやかたをぬけいでゝ、
　かくのがれきぬ今こゝに。

そをしりましゝ父君は、

あまたの人ともろともに、
あとよりわれを追ひませり。
あはれわが死は惜まねど、
いがゝはすべき只ひとり、
のこらん妻のなげきをば。」
「さらば乗りませいざや君、
ふなでのいそぎとゝのひぬ、
あまたのこがね得てんなど
きたなき心あらねども、

さばかりふかき哀れには、
いかでつれなくあらるべき。
つよき嵐もふかばふけ、
さかまく浪もたゝばたて。
かくいふうへはつゝがなく、
君をわたさでやむべしや。」
心いさめるふなびとは、
いとまめやかに打いひぬ。

かくあるほどに大空は、
　あやしきまでにみだれつゝ、
志なとの神のうらさびに、
　あらしはいよ〱ふきしきり、
わきづる雲に天地の、
　あやめもわかずかきくれぬ。
をりしもをちの山もとの、
　しげれる森の木かげより、
こなたをさして一むれの、

　人馬のけはひちかづくは、
守なる父のもろびとゝ、
　こゝに來ると覺えたり。
「いそげよいそげふなびとよ。」
　をみなは高く聲たてぬ。
「いかれる海に打いでゝ、
　からきうきめは見んとても、
いかで見るべきまたさらに、
　いかれる父のみけしきを。」

ふねはきしをばはなれたり、
　青浪さわぐその岸を。
されどもあはれ海神（わだつみ）の、
　驅れる嵐の力には
數にもあらぬうつし世の、
　人のいかでか及ぶべき。
さばれたゆまぬふなびとは、
　心のかぎりつくしつゝ、
日頃きたへしもろうでの、

　折るゝまでもと漕ぎゆくに、
岸には守の今やきて、
　駒をひかへてありけるが、
大荒浪のたゞなかに、
　いのちあやふきおのが子の、
らうたきかひなさしのべて、
　助けをよべる見るよりも、
怒りもうせて忽ちに、
　かなしさいたく打まさり、

「かへれわが子よいざかへれ、
ふたたびもとのこのきしに。
われはゆるさん汝か罪を、
われはゆるさん汝が罪を。」
聲のかぎりにさけびつゝ、
父はなみだにくれまどふ。

されどもかひはあらざりき。
いたはりしらぬ荒浪は
心のまゝにさわぎつゝ、

人のなげきをよそにして
くだくるやがてをとめ子を、
千ひろのしたにしづめけり。

秋

このねぬる朝風のすゝしきに、
わが軒の松風も音かへぬ。
たづねこよたづねこよ、
いざたづねこよやよ秋よ。

まよへる雲にたぐひつゝ、
桐のひと葉をさきだてゝ、
わが蓬生をたつねこよ。

野に山に白露の玉しきて、
汝がやどりつくろはぬかたもなし。
いそぎこよいそぎこよ、
いざいそぎこよや秋よ。

西の海より立そめて、
とほの高ねをたどりつゝ

はやも都にいそぎこよ。

ひとゝせのなかばとも打しらで、
やすらかにいをねぬる人多し。
おどろかせおどろかせ、
いざおどろかせやよ秋よ。

荻の上葉におとつれて、
閨の戸ちかく打さやぎ、
はてなき夢をおどろかせ。

なき夫(つま)のうせたりし時ぞとて、
うきものと汝(な)を思ふ人あらん。
なぐさめよなぐさめよ、
　いざなぐさめよやよ秋よ、
ぬるゝがほなる月かげに、
　みなれしかげをうかべつゝ、
　なげく妻をばなぐさめよ。
八束穂のたりほをばいのりつゝ、
小山田に賤の男はいそしめり。
めぐみてよめぐみてよ、
いざめぐみてよやよ秋よ。
　五百代小田もせきまでに、
　ゆたけき田の實みのらせて、
　おほみたからをめぐみてよ。

立春

きのふか萠えし湊江の、
あしの枯葉を浪こえて、

末とほかりし年月も、
　一夜ばかりとなりにけり。
天にましける佐保姫は、
　神の御言のそのまゝに、
あすより世をば領らさんと、
　今ぞ下界に下ります。
廣けき野邊におりたちて、
　姫はこわねもさわやかに、

「いざ來れかし世の中の、
　われにまつろふものどもよ。
冬はゆきつゝあたらしき、
　年は隣となりにけり。
いざ汝がとももすみやかに、
　春いとなみにいそぎこよ。
聲の内より鶯は、
　志ほれしつばさ羽ぶきつゝ、

谷のふる巣をとびいでゝ、
　姫の御前（みまへ）にぬかづきぬ。
「あはれ我君今よりは、
　わがゆたかなるしらべもて
えぞか千島のはてまでも、
　あまねく春をつたへてん。」
東の海にひそみたる、
　霞はきぬの裾ながく、

おぼろのすがたをやかに、
　姫のかたへに膝まづく。
「やよ我君よみこゝろを、
　安けくおぼせ今よりは、
わが力もて世の中を、
　春のすがたになびけてん。
年の光もわが色に、
　まづ見えそむるさまみれば、

千代にさかゆるわが蔭の、
よそよりたゝぬ春ならし。」

嶺にたてりし山松は、
ひまなくかゝる白雪の
みのしろごろもぬぎすてゝ、
かくいひつゝもあゆみきぬ。

冬ごもりせし梅が枝は、
垣ねにねむる青柳と、

かたみに手をばたづさはり、
けはひしづかにたどりきぬ。

かをれるすがたなまめきて、
ねくたれがみもなつかしく、
玉をまろばすもろ聲に、
ふたりは姫にいひけらく。

「心おそげの深山木に、
ちとせの春を傳ふるは、

わが梅が香のつとめなり、
　いとなく暮らす世のひとの
思ひを春になすものは、
　わが青柳の力なり。
その我らありあはれ君、
　大御心をしづめてよ。」
聲のさやぎに若草も、
　みじかき夢をやぶられて、

ねよげに見えし荻原の、
　葉山の床をたちいでぬ。
いであすよりは初空の、
　かすむばかりに萌えいでゝ、
われ尋ねくるもろ人の
　袂に春をつますべし。」
風はつゞきて來りけり、
　「友よ汝が手はからじ。

わがひと吹きは大方の
　世を春にしてあまりあり。」
いひつゝのぶる双の手に、
　雲の眞袖を打はらひ、
とゞろくあゆみほこりかに、
　姫のあとべにひかへけり。

* * * * * * * * * * * *

夜もふけゆけば十あまり、
　ふたつの音のひゞきつゝ、

今年へ降る鐘つきの、
　かげも勇みて見えにけり。
されども四方は露ばかり、
　春のけしきの見えもせず。
雪げの空もさながらに、
　こぞのまゝにてのこりけり。
けふにあけゆく山のはの、
　峰の横雲わかれつゝ、

千さとに延(は)ふるしめ縄の、
　ほのめくまでになりぬれど、
なほ世の中はつゆばかり、
　春のけしきの見えもせず。
雪げの空もさながらに、
　こぞのまゝにてのこりけり。
先刻(さき)の霞やいかゞせし、
　さきの柳やいかゞせし、

梅鶯も風松も、
　さらにそのかひあらざりき。
かくあるほどに東の
　空打匂ひいづる日の
まばゆきかげにたぐひつゝ、
　「戀」はあめより下りきぬ。
大地にくるやたちまちに、
　たへにくすしき力もて、

あるは目に見ぬ塵となり、
　あるは天ぎる雲となり、
あるは草の根あるはまた、
　鳥けだものゝ肉の肉、
あるは百千の人々の、
　心の底をめぐりつゝ、
そのかゞやける光もて、
　岩まをゆくや谷ぐくの

さわたるきはみあめつちの、
　よろづのものをあたゝめぬ。
そのはかりなきめぐみもて、
　よもにみてるや天雲の
むかぶすきはみ天つちの、
　よろづの物をうるほしぬ。
かくありしより鶯の、
　涙の氷とけゆきて、

その色となき霞さへ、
　春のけしきににほひつゝ。
松も一しほ綠して、
　柳のまなひいちゞるく、
ぬるむか風の音なぎて、
　草もみながらもえゆけば、
軒ばにつゞく萬代の、
　旗手のなびきのどやかに、

わがかしこきや浦やすは、
　春のひかりにみちにけり。

小夜砧

よもきが宿もかたぶきて、
　軒もる月の影さむく、
壁のこぼれのこほろぎも、
　心ぼそさをそへにけり。

まがきも野らと荒れはてゝ、
　風もさはらぬ閨の戸の
ほかげに顔をそむけつゝ、
　ころもしで打つ女（をみな）あり。
たが秋風を身にしめて、
　あやなき物や思ふらん。
しのびにぬぐふ白露に、
　乾かぬ袖もあるものを。

いたはりしらぬ淺茅生の
　虫のねをさへかけそへて、
絞るにあまる露けさは、
　きぬたの音もしめりつゝ。
夫（つま）はひとゝせすめろぎの、
　おほみいくさに出でゝより
こゝらの秋はかへれども、
　そよとの音もなしとかや。

君が玉づさ懸くといふ、
　雲井の雁は名のみして
むすぼほれたる床の露、
　はらはんよしも無りけり。

世の人づまはきのふけふ、
　醜(しこ)のゑみしをやはしつゝ、
飾るにしきも花やかに、
　ふる里さしてかへるなり。

老もわかきも諸共に、
　ゆくての空にうちいでゝ、
千代に八千代とうたひつゝ、
　喜ばしげにむかふなり。

父よといひてたちまちに、
　玉なす頰をさしつけて、
胸のあたりにむつるゝは、
　おのが愛子(めづこ)にあるならん。

思ふ心もいへばえに、
　うれし涙にかきくれて、
かたみに手をばとるなるは、
　はしき妻にやあるならん。
そのうれしさに引替へて、
　歸らぬ人をまちがてに、
契りかはせる人皆の、
　ためしにもるゝ憐れさよ。

「うはの空なる嵐だに、
　まつにはかよふ習ひとや、
うき世のほかをゆく月も、
　しばしは露にてるものを。
頼めしことやあだなりし、
　契りしことや忘れてし、
わぶる枕の夢にだに、
　などてか君の見えもせぬ。」

信田（しのだ）の森のくすのきの、
千枝にや胸のみだるらん、
あぐる腕（かひな）もわなゝきて、
槌のしらべもたゆみゆく。

夜はやう〳〵にくだちつゝ、
ほそる燈（ともし）の影くらく、
弱るか虫の聲たえて、
田川の水もねむるなり。

軒端の荻か木がらしか、
穗波をわたる小夜風か、
前の棚橋音たてゝ、
こゑくる者や何ならん。

はらはぬ庭の草わけて、
駒のあがきのやむなべに、
板やのとぼそ打たゝき、
音なふ聲のきこゆなり。

荒れたる閨のひまとめて、
　とのもの方を見出せば、
霧のまがひに影うすく、
　戀しき夫(つま)ぞたてりける。

夢かうつゝかうつゝとも、
　夢ともわかぬ嬉しさに、
身を倒しつゝさしよりて、
　「よくぞわがせこまさきくて。」

旅路の露に弱りけん、
　身は朝影とほそりつゝ、
やつれはてたる手をのべて、
　泣きふす妻をかきなでぬ。

「あはですごしゝ年頃の、
　わびしかりつるとだえにも、
思ひたゆまで只ひとり、
　われを待ちたるうれしさよ。

いざ今よりは諸共に、
　千代に八千代に契るべく、
とはに動かぬ岩が根の、
　つひのやどりに急ぎてん。」

軒の雫にたちぬるゝ、
　妻を輕げにかきいだき、
かたへの駒にうちのせて、
　やをら手綱をかいぐりぬ。

「あはれ吾夫まちねかし、
　寢よとの鐘もうつなるに、
こよひは馴れしわが閨の、
　なごやが下に明かしてよ。」

「あな心無のいひごとや、
　こん年月の末かけて、
千代に住むべき我宿を、
　いそぐに何か憂かるべき。」

いひつゝ鞭を押當てゝ、
三つ四つ二つ打つほどに、
駒はあがきもいと早く、
大地をけりて進みゆく。
村里とほくはなれつゝ、
苔の細道わけくれば、
かたへにそよぐ枯尾花、
草も夜寒やわぶるらん。

ゆくての方は目もはるに、
高がや空をかすめつゝ、
わぎへのあたりいづくぞと、
かへり見すれどかひもなし。
野もせになびく村霧に、
月の光も影ふけて、
寢覺やすらんさを鹿の、
聲ぞほのかにもれくなる。

いつしか野邊もすぎぬれば、
　並立つ松の影くらく、
星のかげさへ木がくれて、
　さゝやく風の音すごし。

寒けき森の下露に、
　妻は心も冷えいりて、
われかのさまにおびえつゝ、
　汗もしとゞに打伏しぬ。

やすまぬ駒のあゆみにも、
　夫はあかずやおもふらん、
そへ打つ鞭のひまなきに、
　はやちのごとく翔(かく)るなり。

つもる落葉のさやげるは、
　深き山路に入るならん、
白雲路をうづむるは、
　み山の奥になるならん。

岩瀨の浪のとゞろくは、
　谷の小川やわたるらん、
雫の露のちりくるは、
　瀧のあたりやすぐるらん。
こゞしき岩のつゞらをり、
　のぼりつをりつゆくほどに、
千さとのほかにきにけらし、
　五百重の峰もこえぬらし。

さすがにたけき龍駒《たつこま》も、
　ゆきなやみつゝ佇めば、
つきいだしたるあけぐれの、
　鐘ぞそびらをたたきける。
物も覺えぬけうとさに、
　あたりの景色ふと見れば、
人氣たえたる古寺の、
　半ばやれてぞたてりける。

所せげなる蓬生の、
しげみがもとの塚かげに、
をれかたぶきていとすごく、
苔のそとばもみだるなり。

法のともしと照すなる、
月の光りもいと青く、
をり〳〵かよふふくろふの、
聲ものすごきをりしもあれ

とゞろきわたる木枯しに、
忽ち馬はうちたふれ、
妻もろともにものゝふは、
塚の中にと落ちいりぬ。

まとへるころも打さけて、
胸もあらはになるなべに、
手足の肉もおちはなれ、
まなこは身よりまろびでぬ。

驚く妻は只ひとり、
　玉をのべたるやは肌を、
骨のむくろにいだかれて、
　土の中にぞのこりける。
をりしもきゆる月かげの、
　闇をのこして入るあとは、
木深くもゆる青き火に、
　うかるゝ魂ぞさけぶなる。

魂まつり

くゆる蚊やりのなかりせば、
　ありともみえぬ山もとの
しげき柳のしたかげに、
　かすかにさせる草のいほ。
夕かげふかくなりゆけば、
　魂迎ふとやむぐらふの
いぶせき庭におりたちて、

苧殼(をがら)をりたくたわやめは、
立のぼりゆくけぶりにも、
まがへし人やおぼゆらん、
落つるなみだのさしぐみに、
あやめも志らぬ袖のうへ。
わが子はぐゝむいとなみに、
日にけにやするかひなとも、
知らでやねむるをさな子の、

かしらかきなでいひけるは、
「あはれわが子よ心して、
ほのほの末をまもりてよ、
けぶりに乗りて父君は、
今こそこゝにきますなれ。」
父としきゝてゑましげに、
かげきゆるまで見てけるが、
やがてこわねもいとひくく

「母上いづらちゝ君は。」

「かしこに見ゆる御佛（みほとけ）の、
　おましのほとりいとちかく、
なびく烟りは父君の、
　おはすしるしとさとらずや。」

かくうちきゝてをさな子は、
　乳ぶさもつ手もおくまでに、
ゑみくつがへりうれしげに、

　ほとけのかたに打むかひ、
「あはれ父君年頃の
　おぼつかなさにわびはてし
母とわれとを打すてゝ、
　いづくの空にゐましつる。
君がみ心かくまでに、
　とまるばかりの國ならば、
などてかわれをもろともに、

率てしもおはせざりにけん。
いざ今よりはこの宿を、
千代のすみかと定めおき、
いづくに行くもとまるにも、
ひとりはなるゝことはなく、
只玉ゆらの時のまも、
みそば去らずもあらせよ」と、
ことゝふさまも愛らしく、

しどけなげにぞうちかたる。
かくするほどに風かよふ、
軒にかゝぐるともし火の、
またゝくひまに夏の夜の、
明くるにまなく更けゆけば、
をみなは乳子を身にそへて、
かたしく閨のさむしろや、
とけてねられぬ手枕も、

しばしは渡る夢のわだ。
誓ひの舟にゆられつゝ、
ふたつの海をすぎゆくに、
やがてもはつる鹿の園、
鶴のはやしを見いるれば、
うしろの光りかゞやきて、
たつわが夫のかたはらに、
千草の花をかざしつゝ、

あそぶわが子のあるほどに、
たちまちくだる紫の、
雲の迎へにうちのりて、
のぼるかかげの大空に、
消えゆくとみておどろけば、
わが子の笑がほさながらに、
夢のまゝには見ゆれども、
身は冷えいりて玉のをの、

いきはたえてそのこりける。

をとめ塚

しるしの石に苔むして、
きざめる文字はすがたなく、
むかし忍ぶの草のへに、
露もみだるゝ處女塚。
げに紅顔も一片の、

骨とくちてはまれ〳〵の
人あとたえて芳魂の、
うらみかさなる土の下。
かたへに瘠する白楊の
梢に秋の風たてば、
露も涙もあらそひて、
あはれ身にしむ夕まぐれ。
菅の小笠をかたぶけて、

こなたにたどるものゝふは、
山わけごろも日數へて、
肩のまよひもあらはなり。
しらぬ路にやさずらへし、
なやめるあゆみ進まぬに、
はやをちかたに日は落ちて、
ゆくてに深き霧の海。
行くへ定めぬ旅の身は、

いつこも同じかりやどり、
こよひは露をあるじにて、
嵐のしとね借らんとや、
塚の小蔭に身をよせて、
しのゝ小篠のかりまくら、
やをらかたしく岩床は、
夢路のほども冴ゆならむ。
やがてのゝしる人の聲、

爭ふごとき ありさまに、
耳そばだつるものゝふが、
前にたちたるをのこあり。

まなこ血走り頬やせて、
髪はおどろと亂りつゝ、
助けもとむるけはひして、
こなたに向ひひさまづく。

「やよ我君よねがはくは、

しばし御大刀(みはかし)貸したまへ、
思ひかさなるわがあだに、
恨みを報い侍るべし。」

泣き訴ふるあはれさに、
止むなくわたすつるぎ大刀、
手にとるやがて其をのこ、
かき消すごとくうせにけり。

忽ちとほく大刀音の、

地下にひゞくときくほどに、
血がたなさげてかのをのこ、
再びこゝにあらはれぬ。
げに我君のなさけにて、
日頃の本意（ほい）もとげ侍り、
あゝたふとしやこの惠み、
いかで忘れん末かけて。」
よろこぶさまを見るにつけ、

心もゆかぬものゝふは、
あはれ如何なる事のよし、
語れきかんと尋ぬれば、
「いふもやさしき身のむかし、
耻を晒すに似たれども、
罪や消えましいざさらば、
くづし出でてんかたはしを。
葦原しげきこの國に、

むかしひとりのをとめあり、
世にふたつなきそのかたち、
たとへてのべんことばなし。

玉に比せんかなつかしき
きぬのかをりを何とせむ、
花といはんかうつくしき
聲のあやをばいかゞせむ。

あしたに眉をつくろへば、

指より月はのぼりつゝ、
夕べに髪を理むれば、
をぐしにかゝる春の雲。

ひと度見てはむらきもの
心みだれぬものはなく、
ふたゞび見てははたまぎはる
いのち惜むもなき中に

水火もさけじとばかりに、

　きたるひとりは血沼男（ちぬをとこ）、
これに競ひしひとりこそ、
　げにはづかしやおのれなれ。
千づかの文を彼やれば、
　萬づのものをわれ贈る、
雪のあしたに彼ゆけば、
　雨の夕べにわれは訪ふ。
いづれ劣らぬこゝろざし、

　靡きわづらふをとめ子が、
心のつひの定めとて、
　はかりいでたるその事は、
『生田の川の川づらに、
　うきてたゞよふ鴨のむれ、
正しく射なんその人に、
　わが身は寄せんまよひなく。』
こを聞きたりしおのれらの

その喜びやいかなりし、
やがて弓矢をたばさみて、
定めの場所にいたりつく。

川とほじろくうちはれて、
さゞなみよする夕風に、
ころもの袖をひるがへし、
弓弦(ゆづる)しぼれる血沼男(ちぬをとこ)。

うす紅梅の狩衣に、

紫にほふ袖くゝり、
紺のむらごの指貫は、
げにあざやけき姿かな。

流星一過たちまちに、
鴨のかうべのくだくれば、
かたへにゐたるもろびとの、
めでたゝへぬはなかりけり。

いざや手なみを見せんずと、

弓腹(ゆばら)ふりたて征矢(そや)たぐへ、
心の駒をはげまして、
おのれも向ふ鳥の的(まと)。
ねらひ定めて射放てば、
飛びゆく矢筋まがひなく、
雨のおほひ毛打みだり、
弱腰(よわごし)かけてつらぬきぬ。
ともに精しきものいふの、

わざのけぢめをわかちかね、
せんすべつきてをとめ子は、
いよいよ思ひに沈みけり。
『われあればこそかばかりに、
多くの人を煩はせ。
あゝおほけなき是非を
何によりてかのがるべき。』
つもるなげきの末遂に、

をとめは家をのがれいで、
名はかひもなき生田川、
　底のもくづとなりにけり。
かの血沼男こをきゝて、
　いざわれもとてあと逐へば、
などておくれんおのれはた、
　ともに水沫ときえうせぬ。
身は冷灰とかはれども、

かはらぬ戀の物思ひ、
燄にやけて修羅道の、
　ちまたに今もまよふなり。
今日しも君がたすけにて、
　かさなる恨はらしたり、
げにうれしや」といふ聲の
　末かはりゆくあさ嵐。
ふと目ざむればものゝふが、

借しつと思ふつるぎ大刀、
血しほにまみれ古塚の、
草の上にぞのこりける。

戀

蛟龍くるひ鱷怒る
千ひろの海の底にだに、
きよき玉藻につゝまれて、
すゞしくひかる眞珠あり。

まがみはさけび虎ほゆる
五百重の山の奥にだに、
玉をちらして岩間より
したゝりいづる清水あり。

嵐を孕み雲おこす
すごきみ空のをちにだに、
よるの帷（とばり）のあひだより
ゑまひをもらす星ぞある。

いつはりうらみ憂さねたみ、
あつまる人の胸にだに、
などてか神のさづけたる
戀のひかりのなかるべき。

江上送人

水のほとりの月たるなかれ、
水のほとりに船たるなかれ、
船は別れの思ひをのせて、

月は別れの場をてらす

花の使

旅のやどりのさくら花、
今ひと枝を折り取りて、
雲山へだつ故郷への
みじかき筆にかへつべし。
窓に書よむ父うへの、

わがありさまを問ひまさば、
汝(なれ)が面(おもて)のにこやかに、
　物學びすと答ふべし。

母屋に機織る母君の、
　わが身の上を問ひまさば、
汝(な)が枝ぶりのをゝしくも、
　つゝがあらすと答ふべし。

思ひにこもるわが妻の、

　ひそかにわれを尋ねなば、
汝(なむち)が花の上の露、
　目に浮けたりと答へてよ。

夏夕風

さみだれがゝる大空の、
　雲にとおだたる夕まぐれ、
暑さに倦める吟窓に、
　涼しさおくる夕風よ。

八重の汐路のわだの原、
　片帆をおくり眞帆むかへ、
花さく浪にまじりつゝ、
　今までなれはありつらむ。

釜底に座する是陸地(このくがち)、
　吹くとて來る汝(な)を待ちて、
幾もゝちゞの人の胸、
　いかにうれしく思ふらん。

行け野に山に森林に、
　畠に小川に谷をかに、
空あふぎつゝ汝をまてる
　町にちまたに家々に。

梢にすくふむらすゞめ、
　吹きて夢路を淸うせよ。
苔の下ゆくさゝれ水、
　吹きてすゞしき聲そへよ。

千枝さしおほふ奥山の、
　杉の梢の深きかげ、
いざ吹き立ちて靈妙の、
　樂のしらべをひゞかせよ。

あゝうつくしき花の上、
　あゝかんばしき草のもと、
吹きわたりゆくなれが身の、
　いかにたのしく覺ゆらむ。

亡き人こふるたわやめの
　宿の橘すぐる時、
汝が香はいかにいにしへを、
　しのぶ涙のつまたらむ。

罪咎しらぬみとり子の
　ねむりの枕なづる時、
汝が音いかに天國の、
　めぐみのひゞきもらすらむ。

影とやせたるおひびとの
　病ひの床をたづねては、
汝が涼しさはいかばかり、
　いまはの命延ばすらむ。

戀にやつるゝをとめ子が、
　ながむるほとり訪ふとては、
汝が身はいかに頰のへの
　熱きなみだを乾すならむ。

早苗とるなる五百代の
　門田の菴に吹き來ては、
汝が手よいかに賤の男が、
　あゆる汗をやぬぐふらむ。

行け野に山に谷丘に、
　畠にちまたに家々に、
さてゆけなれがふるさとの、
　大海原の沖のへに。

浪より浪をわたりつゝ、
　まだかへりみぬふるさとの
夢だにも見ぬ檝まくら、
　しづ心なき船人は
汝がなつかしき音なひに、
　馴れし故園の森のかげ、
小川のさまをうかべつゝ、
　心なぐさとなすと知れ。

やまと琴

やよやまと琴ことゝはん、
　なれはなどてかうき秋の
しらべかなしきねにいでゝ、
　なけき加ふるたねとなる。
「あはれわが君きゝたまへ、
　わがさきの身は琴ならず、
君をほのみし一目より、

思ひにきえしをみななり。

初ごひ山の山ぶみに、
思はぬ君を思ふとて、
あはでの浦に年をへて、
はかなく拾ふかたし貝。
むなしき床にねざめては、
夢だにも見ぬ手枕の
雫は淵とつもれども、

君を見るめは生ひもせず。

いたづらぶしを重ねつゝ、
中の思ひに身はもえて、
消えんとすれどしかすがに、
たえぬ命をうらみしに、
神もあはれとおぼしけん、
君に手馴れて年ごろの、
胸はるけよとかくざまに、

わが身を琴としたまへば、
形（かた）こそかはれかはらざる
思ひはおなじしるしとて、
今も吾夫（あづま）を名におひて、
泣きこそわたれ世の中を。
すげたる糸はいにしへの、
わが黒髪のなごりなり。
中高まれることぢこそ、

さわきし胸のしるしなれ。
かきなす音のわびしきも、
ながき恨みのそへばなり。
水のしらべの身にしむも、
涙の露のおけばなり。
あはれわが君かくばかり、
なげく心をおもほさば、
幾もゝとせの末までも、

搔なでたまへひさのへに。」

運命

「沖のはやちのふきあれて、
み空もゆるゝ高潮に、
今こぎいづるおのれらが、
命はちりに似たりけり。」
夜ふねよそほふあまびとは
うしろめたげにかくいひぬ。

磯べに高く家ゐして、
浪をよそなる富びとは
「いざやわぎもこはや寐なん、
こよひは風もさむけきに。
いひつゝやをら玉床の
なごやが下にうちふしぬ。

浪よりしらむしのゝめに、
百千の魚をつみのせて、
あまはことなくかへりきぬ。

　されども岸の高殿は
夜半によせたる大浪に、
　くだけて跡もなかりけり。

漁郎

松原こゆる夕風に、
　たく藻のけぶりなびきつゝ、
さびしくくるゝ沖のへの
　小島がかげもかくれけり。

幾とせ浪に馴れけんを、
　さてしも荒き磯のべに、
をちをながめて海士びとの
　數もあまたにみだれたり。

をりしもひとりおひびとの、
　船まつほどのなぐさめと、
わらはをみなをうちつどへ、
　身のいにしへをかたりけり。

あるは風あれ雲まよふ
　空のみだれにふなでして、
かへるすべなき海原に、
　日かずをへてしわびしさを。

あるは浪路の花もさく
　春のうらゝに棹さして、
つなで引く手もたゆきまで、
　幸（さち）多かりしうれしさを。

またある時は闇の夜に、
　鹽瀬をすぎし大ぶねの
岩にくだけてたちまちに、
　沈みてうせしかなしさを。

またある時は月清み、
　こぎてゝ見れば久方の
天にものぼるこゝちして、
　ひとよ遊びしたのしさを。

わらはは萬づわすれつゝ、
翁の顔をまもりたり、
をみなもかうべうちたれて、
言葉もあらず聞きほれぬ。
かくあるほどにをちかたの
けむりの沖をかきわけて、
あまのよび聲かはしつゝ、
こぎくる船の二つ三つ。

やがて渚にちかつけば、
つどへるあまはみながらに、
かたへのくゞつひきさげて、
そなたざまへと走りゆく。

綱くりよするものもあり、
あみ乾(ほ)しわたすものもあり、
かたへに高き眞砂地に、
船おしあぐるものもあり。

鰭のひろもの籠に入れて、
　數いとさはに持ちゆくは、
このわたりなる里なかの、
　市のちまたにはこぶらん。

土にまみれし五つ三つ、
　僅かに乞ひてかへる子は、
世に往みわぶるたらちねの、
　夕げのためといそぐらし。

ゑばしがほとに人々の、
　こなたかなたに行きわかれ、
さへづりあひしこわねさへ、
　あとなきまでになりゆけば、
おのが時ぞと夕ぐれは、
　つれなしづくる浦浪の
音を殘してあめつちを、
　ひとつ色にぞつゝみける。

春の浦づと

かすめる沖を見渡せば、
いまだわかれぬあめつちの、
はてなく期(ご)なくきはみなく、
あやしく奇(く)しきながめかな。

朝けの潮のさわぐ時、
日かげかゞよふ空を呑み、
夕べの浪のくるふ時、

五百重むらだつ雲を吐く。

鷲のおりゐる岩かどに、
千たび嵐をくだきつゝ、
みなわさかまく青ぶちに、
くもゐる峯をひたすなり。

海とないひそよるひるに、
二つの息のかよひては、
忽ち高くまたひくゝ。

變らふ胸のゆらぎあり。
水とないひそ雨かぜに、
花と咲きつゝ雪とちり、
いさごの月をもてあそぶ、
ふかき心のみやびあり。

見ずや千さとのはてもなく、
生きてながるゝ血の水脈（みを）を、
聞かずや高く塵の世の、

夢おどろかすとゞろきを。

いてやこよひも松蔭に、
かりねのまくらそばだてゝ、
「まこと（ツルース）」を歌ふ浦浪の
おとをひろはん家づとに。

夕づゝ

見よ春の日もくれがたの

うすみどりなる大空に、
たてる霞の袖がくれ、
ほのめきいづる夕づゝを。

明くるわびしききぬ〴〵に、
涙の頰もとりそへて、
あした面なきたわやめが
はぢらふさまに似たるかな。

あゝ世のわざにいとまなき

ちまたのうへにあらはれて、
ねむりをすゝめ戀をまし、
うさなぐさむる夕づゝよ。

汝がなまめける影させば、
世の若びとは時ぞとて、
心とけたるかたらひに、
もゆる思ひをかはすなり。

なれがしづけき影させば、

野田の小牛も今はとて、
かはづなくなるあぜづたひ、
ふしどをさしてかへるなり。
あはれ向へばわぎもこと、
たゞに相見るこゝちして、
清くすゞしきそのまみの
見れどもあかぬ夕づゝよ。
いでやおのれは「想像」の

空ゆくはねにうちのりて、
汝(なれ)大神の魂のべに、
さもらひなれんとことはに。

里川

春風ぬるとさと川の
岸にたゝずむをとめ子が、
裾ひるがへる足のべに、
何をさゝやくさゞれ浪。

「あゝのどかなる日のかげに、
ゆたけくねむるさと川よ。
なれが心をこゝろにて、
けふのひと日をくらさばや。」

「さないひはてそをとめ子よ、
底の思ひのあるからに、
やがておもてにあらはる、
うれひの皺を何と見る。

すぐればはやき年月や、
汝が片生ひのそのむかし、
行末こもるくれなゐの、
わらはすがたを見てしより、

月日にそひて汝がさまの、
にほひまさるを見るにつけ、
こがれのみゆく身ひとつの、
堪へぬなげきをしるや君。」

「川のをちにはさわらびの、
もえつゝわれをありまてり、
その野を志めてうぐひすも、
人來とばかりまねくなり。
いて渡りゆきこの袖に、
春の色香をつみためて、
あまるたもとに千代うたふ、
聲の匂ひをかけそへん。」

「遠き時よりながれきて、
あまたの人をうつせども、
いましのごとくうるはしく、
かゞやくかげはいまだ見ず。
われはわすれずいにし夏、
汝が涼みとる岸べより、
白きはだへのうつりきて、
胸ときめきし夕くれを。

われはわすれずすぎし春、
なぎさに落ちし汝が髪の
かざしの花のうつり香に、
心さわぎしあけぼのを。」

「こよひ暮れなば淺茅生の
　雲雀の床にやどかりて、
結ふや草葉の白露を、
　しばしあるじのかり枕。

やがて野末に月すまば、
　今ぞと吹かんわかせこが、
笛をしるべに手をとりて、
　かたりあかさん長き夜を。」

「みぎはの草に身をかへば、
　なれが摘む手にふれましを、
川べの松に生れなば、
　汝が寄るかげとならましを。

あはれつれなき心にも、
かくまでわぶるかたごひに、
やう／＼よはる玉の緒の、
あはれをくまばをとめ子よ。

只ひとたびのおもひでに、
汝かうすぎぬのやわはだを、
わが胸のへにさしそへて、
心ゆくまでいだかれよ。」

やかてをとめはかなたなる、
　のとけき野べにいたらんと、
赤裳のすそをかゝげつゝ、
　志づかに川をわたりゆく。
つきぬ恨みも逢ふ夜には、
　うちいでにくきすがたして、
浪はをとめの足もとに、
　はづかしげにも狂ふなり。

盲女のうた

春はくさ木をときまぜて、
　にしきおりなす佐保姫が
になき巧みの見ゆとかや。
　秋は音すむ空の海、
ふねをうかぶる月びとが、
　ふかきみやびのありとかや。
あめをさゝふる高みねに、

　白雲ゆくと人はいひ、
すなあざやけき海原に、
　松青しとぞわれはきく。
されどもわれがかなしむは、
　そを見ぬからのわざならず。
花になれてはなか〳〵に、
　ちるわかれこそありといへ、
月めづとても年ごとの、
　雲の恨みのなからずや。

海やま長しいかでまた、
ながめはつべきこの身かは。

世をわたりゆくなりはひの、
いとなきほどを晝となし、
わさうちをへでしづやかに、
やすむあひだをよると見て、
こゝろのまゝにとしをふる
わがたのしみをしるや人。

たゞ父君のみ手づから、
膝に我身をうちのせて、
めでうつくしみたまふ時、
またなつかしき母うへの、
かしらなでつゝこまやかに、
われをなくさめたまふとき、

またわがせこがうれしげに、
ゆるくわが手をにぎるとき、
かゝる御影をあふぐへき

みる目あらばと思ふにも、
　くだくる思ひせきあへず、
　胸のなみだはあふるなり。

『戀』のをとめ

春風かよひ草萌えて、
　泉ながるゝ森のかげ、
緑の髪をゆりかけて、
　『戀』のをとめはたゝずめり。

時にかたへを過ぎてゆく、
　いでたち清き武者一騎、
をゝしき聲に呼びけるは、
　「をとめよ來ずやもろともに。」
をとめ默して首振りぬ、
　彼（かれ）不興げに過ぎ去りぬ。
あゝけがれなき戀こそは、
　猛き武力も得ぬなりき。

次に來かゝる人かげは、
すがたやさしき伶人よ。
涼しく黑きその瞳、
漆そゝぎし如くなり。

ねぐらの鳥も耻ぢつべき、
嬌喉玉をまろばして、
聲さはやかにいひけらく、
「をとめよ來ずやもろともに。」

をとめ默して首振りぬ、
彼不興げにすぎさりぬ。
あゝ神聲の戀こそは、
妙なる樂も得ぬなりき。

次に見えしは鬢髮の
雪いと白き儒者なりき。
廣くけだかきその額、
百千の才やたくはへむ。

眼光人を射る如く、
　ものゝあはれもなかるべき
いかめしき身も聲たてぬ、
　「をとめよ來ずやもろともに。」

をとめ默して首振りぬ、
　彼不興げにすぎさりぬ。
あゝなさけある戀こそは、
　深き學問（まなび）も得ぬなりき。

次に見えたる人こそは、
　世にやごとなき官人（つかさびと）、
玉ちりばめし冠（かんむり）の、
　きらめくさまの尊さよ。

前驅（さきおひ）追はせたるその車、
　けぢかく添ひし侍（さむらひ）を
こなたにおこせいひけらく、
　「をとめよ來ずやもろともに。」

をとめ默して首振りぬ、
彼不興げにすぎさりぬ。
あゝ尊かる戀こそは、
高き位も得ぬなりき。

さてその後にあゆみこし
陶猗あざむく豪商が、
胸にかけたる萬金の、
革嚢重く見えにけり。

しろがねこがねうち交ぜて、
出すや寶のひと握り、
聲つくろはせいへるやう、
「をとめよ來ずやもろともに。」

をとめ默して首振りぬ、
彼不興げに過ぎ去りぬ、
あはれけだかき戀こそは、
巨萬の富も得ぬなりき。

春風かをり花咲きぬ、
　泉は琴を弾きそめぬ。
いつしかこゝの森かげに、
　『戀』の男ぞ下りける。

なさけ溢るゝ双の眼(まみ)、
　まことこぼるゝその心、
彼さゝやきぬらうたげに、
　「をとめよこずやもろともに。」

をとめはゑみぬうなづきぬ、
　胸と胸とは寄合ひぬ。
あゝ誠ある戀こそは、
　誠の戀を得たりけれ。

こぞの卯月品川東海寺小林院なる縣居大人の御墓にまうでて

羨むなかれよのなかの
　こがねのひかりきぬのあや。

あしたに榮え夕べちる
　富貴は花のひと時を。
說くこと休めよ山を拔く
　たけきいくさのいさをしを。
世に轟きしつわものゝ
　墓は草のみ青けきに。
年の流れの水ぐるま
　たえず變らふ世の中に、

「時」のちからをよそにして、
　とはにさかゆる我大人(うし)よ。
けはしき文の高みねに、
　死なぬことばの城たてゝ、
人のこゝろに千代たもつ
　君は神にも似たるかな。
高角山のみねの月、
　君なかりせばいつかまた

くまなき影にあらはれて、
　千里てるべく世にいでむ。
田子の浦わの葦べ鶴、
　君なかりせばいつかまた、
清くさやけきねにいでゝ、
　天つみそらに名のりせむ。
あふげば高きならのはの、
　名に負ふ宮のことのはを、

今のうつゝに根こじきて、
　植ゑしは誰のいたづきぞ。
いふもかしこきかむろきの
　つたへたまひし神の道、
たえせぬ國のたふとさを、
　告げしは誰のいさをしぞ。
國賣るやつこはびこりて、
　まことの道もすたれゆく、

けふにしもへばいとゞしく
しのばれにけり君がうへ。

あはれ雫にしめりつゝ
夕べの風にしほるゝは
のべの草のみならずとは、
天にもしれよ君が魂。

あはれ思ひにくだけつゝ
かなしき聲にむせべるは、

浦の浪のみならずとは
天にもしれよ君が魂。

詩人の像に題す

人丸

雲をみ空といふなかれ、
うしほを海といふなかれ、
あめつち籠むる汝(な)がふでの
くすしきあとのつくところ。

そこに雲ゆき嵐ふき、
　そこに浪たちうしほわく。

赤人

千秋（ちあき）の雪はかくせども、
　うもれぬ色のいちじるく、
世々のことばはつもれども、
　たちもおよばぬ富士のねは、
げに日のもとにふたつなき
　君が調べのすがたかな、

バイロン

彼が額に雲かゝり
　彼がかしらに霧おもく、
彼が足べに花さけり、
　彼が心は悲みと、
うれひとうさとみだれたる
　ものぐるほしき海にして。

業平

春やむかしとかこちてし

うき名は今にのこれども
わびしき雪をふみわけし
心のあとはたれかしる。
思へばたかき紅梅の
香ぞなか〱にくちをしき。

貫之

和歌の浦わによる玉藻、
げに目もはゆきにしきかな。
土佐のうな路のさくらがひ、

けにたぐひなき光りかな。
そのふたくさを殘りなく、
拾ひしあまぞ君はこれ。

李青蓮

彼の歌ふやたちまちに、
五色のかすみたなびきて、
空ゆく駒に打のれる
鶴衣の道士あらはれぬ。
身は天づたふ八重雲の

あなたにあそぶ心地して。

紫式部

そのひとことは鬼がみの
なみだ傳ふる溝なりき。
そのひとことはあめつちの
心うごかすつまなりき。
そのひとことはものゝふの
あはれみちびく糸なりき。

清少納言

あや織りみだる水ぐきの
色のちぐさにうちそへて、
ヰツトの花もひらけつゝ、
千とせの風にかをるなり。
あゝこれ君がたゞひとり、
ふみならしたる花園よ。

ゲーテ

浮世を障へし雲のはて、

ミューズのけはひけぢかくて、
美の光明の布くところ、
君は飛びゆく想像の
つばさに乗りてよろづ代を、
心のまゝにくらすなり。

西行

わけゆく道のさだめなき
ものと定めてなかむれば、
世はとことはに花さきて、

たえずさやけき月影を、
人やりならずくもらせて、
かこつは何の思ひぞも。

定家

小倉の山を見渡せば、
一しほ千しほこきまぜて、
みるめあやなるもみぢかな。
過ぎしは雲の一むらを、
いかに時雨のそめわけて、

百の色とはなしにけむ。

杜少陵

黒雲きほふわだの原、
斷ちつゝいぶく神風に、
もゝのいかづちくだけきて、
沖のあらいそうちさけぬ。
知れもろびとよこれぞこの、
君がことばのすがたとは。

長明

すなごをまきし旋風は、
文のくるひになほしるく、
あめつちゆりし大地震も、
聲のひゞきにのこりつゝ、
家ゐをやきし烟りこそ、
筆のほのほとなりにけれ。

兼好

戀のかひなの觸れてこそ、

心の緒琴ねはまさめ。
戀の泉をくみてこそ、
玉のさかつきかひはあれ。
思ひやかけし君により、
このことわりをきかんとは。

テニズン

なれがけだかき唇に、
神のことばはきこゆなり。
なれがたふときかしらには、

桂のかむりかゞやけり。
汝がはかりなき心には、
四時のなかめのそなはれり。

芭蕉

思へはなれはあめつちの
なかにかけたる琴なれや。
「自然」の指のふるゝ時、
清くさやけきひゞきあり。
哲理の撥のあたるとき、

すごく志づけきこわねあり。

巣林子

彼れまほろしの力あり、
　彼れやまびとの術もあり。
その持つ糸のあやつりに、
　躍りてくるふ「運」の浪、
浮きつ志づみつゆく人は
　いかに目さむるながめぞや。

白香山

彼がことばゝ我國の
　文人(ふびと)の胸ににほはすや、
彼が思ひは志きじまの、
　やまとにしきに織られすや。
誰れか生れと所とに、
　人のへだてはありといふ。

眞淵

この世をとほく下に見て、

　天とぶ雲のむすところ、
彼が心のやどりなり。
　智といつはりをよそにして、
只まこゝろのあるところ、
　これ其魂のすみかなり。

千蔭

あゝあめつちのたのしみを、
　あくまでうけしうたびとよ。
隅田の花のさくかぎり、

　汝が名かをらむとこしへに。
時のなかれのゆくかぎり、
　汝が名消えせじその上に。

ロングフエロー

人のなさけを緒にすげし
　手なれの琴をかなでつゝ、
彼はあめより下りけり。
　猛きをのこをなごむべく、
なげくをみなをすくふべく、

　幼きちごをおしふべく。

蘆庵

櫻ううれば荒野にも、
　いとなつかしき匂ひあり。
ま玉つゝめばつゞれにも、
　世にふたつなきあたへあり。
「まこと」こむれば平言も、
　またたふとかるひゞきあり。

景樹

その手にふれて道のべの
　小草は花とさきかはり、
みやまの奥の岩かげの
　苔路も光りまさりつゝ、
末野のはてのうけらさへ、
　色あるものとなりにけり。

ユーゴー

テニズンいへりなれこそは、

人の涙のおほきみと。
スヰンバーンもまたいへり、
なれがことばはつるきぞと。
何か加へんいまさらに、
いひけがすべきわが言を。

折にふれて

いざま玉手をさしかへて
けふより千代をちきらばや。
なかるゝ年はたえずとも

戀は老いせじとことはに。
愛のひかりにてらされて、
はえまさりゆくわか世こそ
たふとき酒よ、月ごとに
不言の味はそひほかむ。
いざ頰をしもさしつけて。
つきぬちきりを結ばゝや。
なかるゝ年はたえずとも

戀は老いせじとことはに。
世のうきことにかなしみに
やつれし頬をあたゝめよ。
なげきの霧をはらふもの
今はあらじな汝をおきて。
いざ心よりうちとけて
ちよをひと夜にかたらばや、
なかるゝ年は早くとも

戀は老いせじとことはに。
年まだ若きわが幹に
なれはかゝれる藤なみよ。
葉は朽ち鳥はなかずとも
枝をつらねむとことはに。

墨染櫻

上

五月雨に、はな橘の　ちりしより、
おほうち山は　かきくれて、
時雨そめたる　みやびとの、
そで吹く北の　かぜさむし。
うらさび渡る　このごろの、
哀れはいつと　わかねども、
雁がねさむく　あきふけて、
おまへの眞萩　いまぞ散る。
千草のはなも　うちやつれ、
おき渡したる　ゆふぐれの、

露よりほかは　いろもなき、
雲井のにはの　うらつぼね。
下(おろ)せる小簾(をす)に　ゐがくれて、
打見もたけき　ものゝふの、
こゝろに物や　おもふらん、
曇れるまみも　いとおもし。
片へに伏せる　上臈の、
ねをこそ泣ね　消えかへり、
おもひの露の　しらたまは、
包むにあまる　そでのうへ。

千夜を一夜に　かさぬとも、
　なごりの果は　あらざらん
只假りそめの　わかれ路に、
　こゝろ弱くも　とまりなば、
めゝしと人の　見もやせん。
　云つゝ大刀を　ちからにて、
出んとすれば　たちまちに、
　裾をひかえて　ふし志ずみ、
さはさり乍ら　わがつまよ、
　花にゆきくれ　つきに明け、

はかなき程の　たびねだに、
　別れといへば　うきぞかし。
又めぐりこん　としつきを、
　その程としも　さだめなく、
こなた彼方に　わかれなば、
　おくるゝ袖や　いかならん。
たびぢの末に　おくつゆの、
　かごと計りも　おもひかけ、
今宵はこゝに　とゞまりて、
　こゝろ長閑に　あかしてよ。

まがきに縋る　ゆふつゆに、
みだるゝ蟲の　こゑほそく、
恨みかけたる　ことのはに、
をとこもさすが　うちしほれ。
然はあれども　おもへたゞ、
はしき妻にも　めづ子にも、
たふとき己(おの)が　いのちにも、
換(かへ)ぬは天皇(きみ)の　めぐみなり、
ありし宿直(とのゐ)の　夜半ふけて、
こゝのへ深く　召したまひ、

かく口惜しき　世のなかを、
おもふも袖の　なみだかは、
よせくる浪の　たちゐにも、
頼むはいまし　ひとりぞと、
の給ひさして　はら〳〵と、
おとさせ給ふ　かしこさよ。
數にもあらぬ　やまがつの、
このよし貞を　かくまでに、
たのませ給ふ　みこゝろを、
汲まつらんも　いとゆゝし。

藐姑射(はこや)の山の　ふもとなる、
塵よりかろき　身なれども、
君が御稜威の　追ひかぜに、
にしきの御旗　おしたてば、
なびかぬ寇の　あるべしや。
やがても歸る　みやこぢに、
飾るにしきの　ほまれをば、
こゝろ長くも　まてよきみ。
事わりげにと　おもへども、
夜のまの程も　さだめぬは、

こゝろの外の　いのちなり。
立はなれなば　これやさは、
さらぬ別れと　なりもせん。
おもへば今や　かぎりぞと、
こゝろ細さも　いやまして、
みだるゝ思ひ　かくとだに、
えやは伊吹の　さしもぐさ、
流石にこゝろ　やるとてや、
片への琵琶を　取りいでゝ、
暫しかきなす　四つのいと。

松のあらしや　かよふらん、
　葉におく露の　たぐふらん、
かなしき聲の　いとほそく、
　うらむる音ぞ　身にはしむ。
折しもそらの　志も志ろく、
　夜寒にかぜの　なりぬらん、
蟲のこゑ〴〵　うらがれて、
　月よりひびく　かねのおと。
早夜もふけぬ　いまはとて、
かど立いづる　もの丶ふが、

心をこゝに　とゞめおき、
　我さへわれに　わかれゆく、
後(うし)ろ手まもり　上﨟は、
　身も浮く計り　なげきつゝ、
降(ふり)くるなみだ　せきかねて、
　限りのさまに　うち伏しぬ、
空にいざよふ　つきさへも、
　秋のわかれや　をしむらん、
雁のなみだの　つゆとめて、
　ぬるゝがほにも　やどるなり。

中

眞柴こる杣山下し　さえくれて、
羽ぶく雄鷲の　こゑさむく、
時雨をさそふ　むらくもの、
まよへる色も　たゞならず。
みだるゝ空に　まぎれつゝ、
ひづめの音も　いとひくゝ、
足羽なはてを　ひとすぢに、
こなたに走る　騎武者あり。

その勢わづか　五十餘騎、
旗手うごかす　野あらしに、
よろひの袖を　なびけつゝ、
露を蹴たてゝ　すゝみゆく。
あたりを籠る　ゆふぎりに、
あがき危ぶむ　ゆくてより、
寄せくる人の　けはひして、
大刀の擾ぎも　きこゆなり。
敵かみかたか　わかねども、
やゝ程ちかく　なるまゝに、

旗さしものを　見てあれは、
霧間にうすき　二引兩。
スハヤと叫ぶ　ほどもなく、
かたみに鬨の　こゑあげて、
ぬき放ちたる　あきのしも、
消えを爭そふ　すがたなり。

折しもつらを　ぬけいでゝ、
眞ッ先かくる　武者一騎、
かな物のぐも　さはやかに、
夜目にも著(しる)き　いでたちは、

あか地の錦の　直垂に、
紫すそ濃の　鎧着け、
こがね作りの　おほ大刀に、
しげ籐のゆみ　もちそへて、
のりたる駒も　たつがしら、
五枚かぶとの　緒をしめて、
廿四さしたる　おほなか黑、
矢かしら高に　おひなしぬ。
進めものども　いざすゝめ、
かみの御末の　わが兵ぞ。

あだなふ醜(しこ)の　ゑびすらは、
ひづめに懸て　くだきてん、
いひつゝ手綱　ひきしぼり、
ひと鞭當つよと　みえけるが、
馬おどらして　たちまちに、
てき中めがけ　一文字、
み空にはかに　かきくもり、
吹まく木の葉　さきだてゝ、
山かぜあらく　きほひつゝ、
みぞれ交りに　しぐれきぬ。

雨さへそはる　ゆふやみに、
道はあやめも　わかねども、
赤きこゝろを　しるべにて、
顔もそむけず　むかひゆく。
はやちの如く　とぶ征矢(そや)は、
いのち輕げに　すゝめとか、
閃めく大刀の　いなづまは、
早も消えよと　をしふらん。
隙もあらせず　立つ征矢の、
いたでに駒も　よわりけん、

小溝ひとつを　こえかねて、
人馬もろとも　たふれたり。
つゆも緩まず　たちあがり、
なほ進まんと　するなべに、
とびくる白羽　おとたかく、
眉間のまなか　つらぬきぬ。
たちまち面の　いろかはり、
むすべる口も　濃むらさき、
片手に大刀を　つえつきて、
睨むるまみに　血もあえぬ

かくて在なば　いたづらに、
憂目みんとや　おもひけん、
たゆげに小手を　あしあげて、
われと我くび　かき切りぬ、
はしる血潮の　たきつせに、
ふりくる雨も　いろみえて、
かばねを渡る　荒野風、
かなしき聲に　むせぶなり。

下

淋しやな馴ても嵯峨の　山　の　庵、
はらはぬ庭は　うづもれて、
まがきに近き　さをしかの、
落葉ふみしく　こゑほそし。
つゆけき法の　さむしろに、
あかつき業(わざ)や　つとむらん、
かれゆく蟲の　たえ〴〵に、
狹霧をもるゝ　かねのおと。
今はと志らむ　ありあけの、
昔をさそふ　つきかげに、

ながめ出たる　匂　當　の、
內侍のさまぞ　あはれなる。
袖うちまねく　はたすゝき、
なれも昔しや　志のぶらん、
夜を徒つらに　おきあかす、
露だにものは　おもひけり。
おもへば塵を　いでゝより、
作るかりほの　かりそめに、
おもひし程に　つきもへぬ。
纏ひなれにし　いにしへの、

花のたもとに　ひきかへて、
變りはてたる　こけのきぬ、
かはらぬ月の　かげみても、
我身ひとつの　はかなさよ。
今はたゞ待つ　むらさきの、
雲井にきみを　みてしより、
おまへの池の　松かけて、
思ひしものを　つれなしや。
雁さへかへる　ゆふまぐれ、
きみが越路の　わかれより、

八重立つ嶺の　志らくもに、
そなたの風も　吹き絶えぬ。
覺束なさに　たえかねて、
花のみやこを　すみはなれ、
心もゆかぬ　旅の空。
おほさか山の　志らつゆに、
末はこしぢの　君をたゞ、
おもひ敦賀の　濱　くれば、
世をうみ渡る　あまをぶね、

こぎゆく跡の　志らなみも、
　うらやま敷ぞ　かへるなる。
氣比の社ろを　ふしをがみ、
　枯野のをざゝ　わけゆけば、
ゆふ浪きよき　色の　濱、
　あらちの山も　かすみつゝ。
矢田野の露に　そでぬれて、
　風も身にしむ　あき篠の、
里わの田ゐに　ながむれば、
　雁がねとほく　うちなびく。

露じもさやぐ　朝六つの、
　橋こえきけば　おもひきや、
足羽なはてに　ちる露の、
　君はきえうせ　たまふとや。
名にしもあえて　もろともに、
　何時しか都に　かへる　山、
何ぞはありて　あるかひは、
　君がとまらぬ　名なりけり。
芹つみにけん　ふるびとも、
　かくやは宿世（すくせ）　つらかりし、

ふけゆく鐘をかこちしも、
　おもへば物のかずならず。
恨みはてたる世のなかに、
　永らふとてはなけれども、
命ちまつまのありかとて、
　志ばし結べるかりの庵。
これや浮世のさがのおく、
　今はおもはじなげくまじ。
なげきて何のかひあらん、
　思ひてなにのすべあらん。

欠るは此世のならひなり、
　みつるは常のことならず。
ちるこそ花はめでたけれ、
　逢はぬぞ戀もたふとしや。
いひつゝ袖をうちはらひ、
　やをら板戸をさすあとは、
苫路をはらふあさかぜに、
　讀經のこゑのすみわたる。

龍華寺の富士

靜岡を東南に去ること三里ばかり、駿河灣の海面にのぞみてとほく雲外にそびえたる高峯あり。久能山といふ。徳川氏の始祖家康の英靈を祀るところ、これを日光にくらぶるに、建築の宏麗、規模の壯大はたゞに數等を減ずるのみならざれど、ひとり登臨の美にいたりては、はるかに其右に出づるものあり。前には、かぎりなき有度の浦浪般雷の響きをなして山また山をきづき、うしろには久能うどの岑嶺相つらなりて洪濤のひるがへるがこ

とく海山相呑吐し、萬宇の風烟一幅の畫様をあらはしてまことに、たぐひなき東海の靈區たるを失はず。こぞ神無月、おのれこのわたりの歌まくらを見、かつは、病をも養はんとて、この山のふもと徳音院なる寺の岳陽樓といふにやどりぬ。山がたつきて、清楚なる小樓、よろづつき〴〵しうしつらひて、木々のたゝずまひ、前栽の心ばえなど、はたけしうはあらず。ことに汪茫たる大洋にのぞみて、眼界はてなく、見渡のしいみじくもの哀れなること、げにいひいでん言の葉もなし。天は水に入りて低く、釣艇そらにねむりてのとやかに、愛

鷹、二子、天城の群岳は、紫嵐につゝまれて、縹緲として軒端にかゝり、ちりては開く浪の花、松濤のひびきをたぐへて、またとこしへにおばしまに咲く。夕べには楫ひきをれる鰹ぶね、はしゐの袖にかへりつゝ、あしたには、雲もれ出づる朝日影、まづ文机の島より昇る、あるは、あまがしわざの鹽げむり、あるは秋を掛けたる沖の眞帆、とりあつめたるをかしさは見ぬもろこしの巴陵の勝狀もかくやと思ひやらる。この樓の主人は、德たかくざえすぐれたる老僧にして、氏を山本、名を慈祐といふ三衣に浮世の塵を拂ひすてゝ、ひたすら、

あかつきよひの行ひにたゆみなく、心からなる黑染は世の滔々たるあやしげなる法師とは雲泥のけぢめあり。つれ〴〵なる折、清談のついでに余にかたりけるは、この久能山のかたへをのぼること一里ばかり、けはしきかたそばを傳ひて行きたまはんには、日本平といふところに到りたまひぬべし。日本たひらとは、日本武尊東征の時、しはしいこひたまひし舊跡にて、郡中第一の高地、眺望いはんかたなくめでたし、またそこより東北の方に下りたまひなば世にかくれなきかの龍華寺に着きたまひなん。東海道中、富士のながめの最もす

ぐれたるところにして、日本三景のひとつにかぞへたる人さへあなり。ふりはへさせたまひし旅のおんつとにはこのながめこそこよなからめといふ。いとうれしくて、なほこまかに道のさまなど問ひあきらめたる後、つきの日のひるつかた、風なぎて空もうらゝかなるに、いでやとて、心急く歩みをすゝめぬ。

さゝやけき書橋をわたりて、山間の河原をのぼりゆくに、岩ばしる溪流、青蛇を走らせて、蜿蜒たる草徑やうやうに形ちを埋めぬ。鹽木こる里ひとのあとに從ふこと二十餘町、痩筇の力にたよりて、

峻坂のくるしさをねんじつゝゆくに、しばしありて、やゝ平かなる高陵の上に來りぬ。わけこし谷の紅葉、錦おりかけて、滿目の山畑、恰もあやむしろをしきたらんが如し。行くかたの空をのぞめば、一條のほそ道雲に入りてなゝめに、九重ひくゝして、手に紅日を攀づるかとうたかはる。やゝありて、遂に絶巓に出でぬ。こゝは地をぬくこと一千有十五尺駿遠の兩國雙眸のうちにあつまりて、打見の壯絶快絶なる、まことに老僧の言のはにそむかず。久能山脚下にあらはれて、うとの濱、洲濱に作れるが如く伊豆の崇嶺わづかに寸碧を出し

て數點の螺をつらぬるに似たり。西の方目を極むれば、煙りにまがふ波の上、うしほ吹く長鯨は、潑々としてうごなはる、あゝこれ遠江の御前崎にあらずや。やゝ右のかた、浩々たる原野の末、百錬の水刀は霜を帶びて横たはる。あゝこれ丸子の阿部川にあらずや。そのかたはらに、空にしられぬ一團の黑雲をかもしたるは、木枯しの森にしてまた炊烟の一むら繁く立ちのぼりたるは、これ靜岡の町としらずや。遠く甲信のやま〳〵を始めとして、近く賤機、龍爪、大日、大無間の翠巒あざやかに見えわかれて宇津の山、手越彌勒、燒津、

姥が池淸水、江尻、沼津などの名ところ、はた掌上に指さすが如し。この大觀に接して、そゞろに、神ゆき心飛び、日ごろの欝懷なごりなく消えて、立いでん空も覺えねど、さてのみあるべきならねば道をかへつゝふたゝび麓路のかたへとこゝろざす。茶ばたけの間をつたひ、長松のかげをたどること十數町、ふとかたへを見れば亭然として雲かゝる楠のおほ木あり、千枝をふく風木高くて、年ふるすがた目とまるに、そのひまより、またふるびたるやしろの、いとものすごう立ちたるも見ゆ。つら〳〵おもへば、これ日本武尊をまつれる草薙

の神社になんありける。垣頽れ丹青落ちて、いにしへのおもかげなけれど、神さびかう〳〵しきけはひにるものもなく、いやちこなる御稜威の歳月と共と深ければにや、尊さ心に志みて、おのづからぬかづかれぬ。傳ふるところによれば、尊東夷御征伐のため、吾嬬國へ下りたまひて、この所に來りたまひし時、賊ども並びおこりて、野に火を放ちて、尊を燒きたてまつらんとしたりければ、尊佩きたまへる劍をぬきたまひ、をちかたやしげ木かもとを燒鎌のとがまをもちて打拂ふことの如くと、となへたまひて、劍を打ふりたまひければ、

あたりの草こと〴〵くなぎはらはれて、ほのほ逆賊のかたへなびき、尊はつゝがなくておはしましたりとか。この故よしもて、御劍の名を草なぎとなづけ、また尊の荒御魂をこゝにいはひまつりて、草なぎの神社とは云ふなり。さてまうではてぬれば、踵をめぐらして、遂に龍華寺の方にいそぎぬ。

龍華寺は、久能山を去ること一里有餘、不二見村字村松といふところにあり。近きころ、日近聖人なる僧の、この所の風光をよろこびて、かりそめに庵を結びしより、其名頓に世にきこゆるにいたりきとぞ。馬琴が玄同放言に、大約士峰の眺望は、

駿河國有渡郡龍華寺の庭より觀るを最一とすべしとあるも、やがてこゝを指せるなり。そも龍華寺の地たるや、程ちかき清水灣をへだてゝ、玲瓏たる芙蓉峯の、八葉重く翠天を捧ぐるを認む。愛鷹、箱根、二子、天城の群嶺はその右麓に朝宗して、清見寺、いほさき、隅田川、興津岫崎、岩木山、こぬみの濱、袖師浦、田子の浦、千本松原などさながら目睫の間にあり。みぎには、三保の松原、波のまにみどりを浮べて、ひだりには、清見瀉の古關見る人の心をとゞめぬ。江のおもてには、大君のみつきをはこぶあまぶね楫もほさず、あるは、

姿横たふ富士のねの雪をふみ、あるは底に咲く三保の浦松のみどりをわけつゝ漁歌かたみに答ふるさまいと心ありけなり。世に富士のねをのぞむところ多かれど、あるものは、あまりに遠くして、あるかなきかの姿おぼ〳〵しく、あるものはまぢかきに過ぎて、なか〳〵に雲風のなげき絶えざるをこゝは中らのほとを得て、常にかくれなき神嶺のけはひに接するを得、これ龍華寺のながめの、天下に冠たる所以の一なるべし。また世の名ところ、水によしあるは山のかたおくれ山のながめすぐれたるは、水の心ばへ劣れるが習ひなるを、こ

ゝは海山ふたつのけしきを具へて、上下ことごとく書圖なり。これ龍華寺のながめの、天下に冠たる所以の二なるべし。また世の勝地はおほむね一つの名ところにかぎりて二つ三つをかねたるは少なきを、こゝは清見かた、三保の崎、田子の浦など、天下有數の名區をあつめて、たゞ一眸のうちに收む。これ龍華寺の眺めの、天下に冠たる所以の三なるべし、只なべてのたゝずまひ、優美にすぎ、整麗に過ぎ、たえて壯大瑰奇の趣なく平板單調、つゆ變化なく波瀾なきは惜むべし。これ、眞淵がいはゆるおのづからなる海山の、眉のごとにほひやかに、鏡なすたひらかなれど竟に鷲のかゞなく山の奧鰐のいかれる海のそこひの觀なきものか。さばれ、よもの云物こと〲く詩材を貢してふたつなきながめはつきねど、夕かげのやう〲しげくなりゆかんとすれば、かへり見がちにわかれゆくに夕陽、山のはに殘影をとゞめて、又たぐひなき江山のなごりを惜むに似たり。加茂、駒越、增、蛇塚などの村々をへてわが久能にかへりし頃は、海の音のみくれのこりて、一村暮靄の底にしづやかに、漁火浪を燒きて、海角をはなれんとする新月のかげさやかなり。

浪かけ衣

有渡の濱の風光わすれがたく、わづかなる學びのいとま待ちつけて、ことし四月のなかば、またあからさまに家を出づ。さるは霞にまがふ春の景色見んとてなりけり。新橋に到りて一番の滊車に乘る。あわたゞしき笛聲のうちに、身ははや紅塵をはなれゆくに、微和を扇く春風ゆるやかにして、鳥聲のそこはかとなく匂ひくるこゝちげにいはんかたなし。品川のほとりを過ぐ。鹽げ絶え浪あたゝかにして、わたつみのかざしの花いとのどやか

なり。

品川や旅も奥ある山口にながめそめたる浪の
　　はなかな

川崎の驛近くなるほど、にはかに一鳴の春雷空を破りてきたる。これ滊車の六郷の鐵橋を渡れる也。窓を推して打見いだすに芳草の渡、水上とほく霞みわたりて、轆軋の聲水をわたり、悠々としてゆたかなる綠波、なほあかつきの夢さめざるが如し。

玉川やまだ夜をのこす朝きりをねむりてわく
　　る高瀬舟かな

この川、六郷村にあるより、今は六郷川といへど、

古くは玉川と呼れて、かの六つ玉川のひとつなり。拾遺集に、玉川にさらす手づくりさら〳〵にむかしの人の戀しきやなぞとあるはやがてこゝを指せるなるべし。

神奈川横濱もすぎ、こよろぎの磯のいそしくすゝみゆくに、はや箱根山にかゝるめり。嵐氣ひやゝかにして雲のけはひいと寒けに岩脚をあらへる溪流、玉を漱ぎて、淸冽詩腸に泌み入る心地す。

開けゆく御代にあはすは箱根山ふたゝびとだ
にいかでこゆべき

雲を蹴り岩をうがちて竟に沼津に着す。愛鷹の山

はるかに見渡さる。この山は足高または足柄ともかきてかの新羅三郎が豐原時秋に秘曲を傳へたる有名の古蹟なり。關は山上にありきとぞ傳ふ。

いにしへのあとは見えねどゆく雲のいさよふ
方やあしからの關

青雲のたかきしらべの聲とめて追ひけん駒の
あしたかの山

鈴川よりは、富士のねの見ゆるが常なるを、けふは白雲まなく立ちこめて、只わつかに大麓のわだかまれるを見るのみ。

立おほふ五百重の雲もわがゑがく心の富士は

かくさゞりけり

かたへは名たゝる浮島が原なり。昔しは是沼東西三里餘もありて、とほく富士川につらなりきといへり。平氏のいくさ水鳥の羽音におどろきて、人わろき名をのこしたるも、げにこのところなり。

水鳥のつばさおほゆる白なみにすきしむかし
もうき島がはら

清見がたをすぐるに、空はれ風絶えて、白波練を曳き、日光水にはえて、天地恰も玉壺の如し。かくて江尻にて滊車を下り、三保の松原をひだりに見つゝ、清水をすぎて、晝すぐるほど竟に久能山

につきぬ。

次の日あさまだき、山頂にのほらんとせしにその日は、東照宮の大祭の日にあたりて、貴賤麕至、いとらうがはしくさはかしければ、ひとり海邊に出でゝあゆむ。只見る一むらの煙り海天の春をこめて漫々たる波心、萬疊のゑみをたゝへ、おぼろに浮ぶとほやまのよそひ輕くしてふもとによする片帆短棹の霞を釣るもいとのどかなり。

うなばらの春の心ぞ動きけるひく釣糸の只ひ
とすぢに

このわたりの村々にては、皆鹽ばたといふものを

つくる。岸ちかき平沙にそひて、とり〲に界をたてつゝ潮水を撒きかけて沙にて漉し、更にこを焼きて鹽をとるなり髮とりみだりたるおのこをみなの、みるの如ききぬきたるが汗かきたりて、たえまなくいそしむさま、いとほしくあわれなり。ちいさきをみな子わらはべなどの、またさゞやかなる桶になひつゝ、おなじやうに打まじりたるは、げにいはんかたなくらうたし。

　をぐしだにとり見ぬ蜑が鏡とて幾代かすめる
　　うどの浦浪
　むすぼるゝあまが思ひやこもるらむ靡きも果
　　てぬ鹽烟りかな
　からき世のなげきより立つ薄けむり鹽やくと
　　のみ何思ひけむ

夕つくるほとよりいたゞきに昇る。十數折の磴道を螺旋してゆくに、歩に從ひて海山あらはれ、天地恰も翼を生じたるが如し。絶巓に近きところは、廣やかなる平地にして、多く梅樹を植ゑたり。花ちり香うせたれど、神姿なほ塵襟を清ふするものあり。かたへの懸崖にのそみて、一株の老松あり。樹根蟠結して蒼龍の横たはれるに似たり。物見の松とぞいふなる。踞して眺矚するに萬里の海灣只

ほともなき盆池の如く、寸瀾碎け尺波走り、さきに見し鹽くむあまなど洵に豆人の動くかと疑はる。あまりのくすしさに、しばしは打まもられてあがらめもせであるに夕陽やうやくかたむきて、萬道の毫光海心を射、朱浪狂ひ錦鱗躍る夕ばえのけしきいとまばゆし。しばしありて紅沈み、光り散じ、浪は青く黒くなりて、はては目ぢのかぎり冥々たる煙と化しぬ。日は已に山の端にかくれたるなり。山もとの森、磯ちかき賤が屋つぎ〳〵に影をかくして、草の下露數そはりゆき、よるの守りの星かげも五つ六つほのめきそめぬ。今や塒をいそぐ鳥の

羽音と、賤がかへさの田歌とを殘して、夕ぐれの袖は全く天地を蔽ひたる也。竟に山を下る。例の德音院にやどりぬれど、浪こゝもとにきよりてうら安きいもねられず、時のまにちさとを走る旅なれど、そゞろに都のことみそ思ひいでらるゝや。

都おもふ旅のねさめのともしびをかゝげて忍ふ夢のあと哉

思ひいで草

ことし春のはしめつかた、妻なるものゝ

心地惱ましうて、うどの濱べにあるをとふらはむとてまかりけるに、道すから目にふるゝけしきこよなうおもしろし。七砲臺邊浪しつかにてしろかねの屛風横たへたらむがごとく、心なき水も愁ひの皺のべたるにかといとをかし。いにしへものすごかりしことなどおもふにも

砲なめてふせきまもりしそのかみのけむりも絶えて霞む春かな

春とはいへどいとさむければいつこの田のもも氷ゐぬはなし。いらゝきたるかほ

して賤の男のおりたちたるに、をりしも朝日の花やかにさしそへるには、やう〳〵ひまも見えゆくやうなり。

朝日影さすや田の面の賤の男が鍬の雫も春めきにけり

鈴川より富士のねのくまなう見わたさるゝこそうれしけれ。神代ながらの雪のひかりにかゞやけるさま、けに千度見て千度めつらしきはこのすがたになむ。あからめもせであるほどいつしか清見かたのわたりにつきぬ。海上いとのどやかに、き

のふふりぬる雪の三保の松原にふりかゝれるがかすかに見わたされたる、畫だくみも筆すてつべし。

のどけさは三保の松原ふりつもる雪よりほかの白浪ぞなき

とかくしてかしこにつきぬるに、まづ病のまたくさはやきぬるときくこそいといとうれしけれ。よろこばしのあまり常は一蕉葉だにえ倒さぬおのれの引滿數次たなそこうちあけてあそふに人間の富貴打わすられて塵襟おのつからきよく、開きえ

たる醉郷三萬戶、始めて侯に封せられぬる心地するもいとたのしきや。

わきもこよ琴かきならせ並みたてるかめに酒あり我に歌あり

またの日のあした濱べに出でゝ見る。沖はるかなる一筋のかすみのうちにくろふねのおぼろけに見わたされたる、うす墨の繪を見たらむこゝちす。白浪の家づとにとかよせくる貝も心ありげなれば拾ひなとするほどに、あやしうかくはしき風のそこはかとなくにほひくるに、ふと見

わたせは磯べなる蜑が伏やに、紅梅のなつかしう咲きいでたるなりけり。このわたりのいみじうあたゝかなるよしはかねてきゝしりぬれどいとかうやは思ひかけし。などてよそにのみ見てはすぐへきとおもふほど見てのみや人にかたらむと、口すさびつゝ妻の一枝たをりて見せたるに

手折りえてゑみたる妹がかほばせに匂ひうせぬる
梅の花かな

おのれひとたびこの有渡の濱にあそびて

より、ふたつなき海山のながめわすれがたく、いとまある折々たづねゆきて數かさぬるほどに、ちかわたりの人々ともちかしうなりゆけば、いとゞはなれがたき心地するに、ましてその淺からぬなさけかぎりなきこゝろ、ねもころなるもてなしの、淺はかなる世の人めいたるふしなきには、げになつかしうさしつぎのふるさとの心地もせらるるぞかし。なにがしの詩人の Not chance of birth or place has made us friends といひける、今更にげにもと思

ひいでられてなむ。

こゝにして我世はへかむ有渡の濱塵あらふべく水も澄みたり

かぎりあれば、おもふ心の程よりは口惜しうてふたゝび都なる家にかへりぬ。まちわびぬるいもうとの門に立ちいでゝ打むかふるもいとらうたし。うから多きにあらす、家高きにあらず、前栽は只壺といはむにすぎず。しかもそのたのしみはいかんぞ千金もたゞならむ。ひるはひねもすおのがじゝいそしみつゝ、よるは一

ところに打つとひて物語し、さてしばしありて、いもうとは文よみ、妻はきぬうち縫へる、から國びとが三聲の一つは缺けれどこを見るかたはら目、けに天倫の至樂王侯も易へずとぞいふべき。

うちつとひ語りかはせばちよろづのこかねぞこもる埋火のもと

煤はらひ

すとてふしやる文机に
つもれる塵の二つ三つ四つ

ことし夏の頃、みやこのあつさ避けむとて、しばしこゆるぎの磯邊にやとりけることあり。西行がしるしつけし言の葉ののこれるもあり、かつは都近くてよろづにたよりよきわたりなれど、夏はこゝかしこより人々あまたつどひきていとらうがはしく塵をさくるほいにはかなはぬところなるを、知る人のありて、必ずといひおこせつればさは只暫しの程とてゆきつるなりけり。あなさゆふなけがれなき浪と語らひ、淸らかなる風とことゝふに、

さすがにところせかりしあつさもわすらるゝ心地す。

見るからに塵の思もすゝがれぬ浪は心にかゝるなりけり

おのれがやとりつるは町をすこしはなれていとしつやかになかめよきところなり。夕つかた前なる畔に立いでゝ見るに高麗山の松よりくれそめてやう／＼ほとちかきところも見えずなりゆくに、とほきちかき賤が家にともしびのほのめきそめたる、いとをかし。

畑中の賤が伏屋にともし火のほのめきそめて日はくれにけり

いかなりけるをりにか

日くるればいとゞもまさるわが胸の戀や夕べの星とてるらむ

十一月の始めつかた、にひばり筑波の山にのぼらむとて朝まだき人々とたちいつ。空はれ氣さわやかに袂を拂ふ涼風いと心地よし。田端よりわかれて千住に出づる程もなく、はや利根川にもきたるめり。水のなかれとほしろくしてつゆはかりの浪

もなし。思ひかけず畑中より白帆の見えたるは川のうねりたればなりけり。

打よする穂浪も見えぬ畑中をいかにこぎゆく白帆なるらむ

土浦にて車をくだる、町うちすぎてゆくにはづれに小陵あり。うへに酒旗のひらめきければのぼりていこふ。おばしまによりて見渡せば霞が浦脚下にひらけて千ひろの鏡をかけたらむがごとし。

ゆほびかに浪路は見えて浦の名の霞むうらみもはれしけふかな

また

あかず見るわれもいつしかうつしゑのなかなる人
とならむとすらむ

家の名を醉花亭とぞよぶめる、折から雁のなきわたるに

花に醉ふ軒端に雁のおとつれて秋もよしあるすま
ひなりけり

夕つかた筑波町に達す。仰き見れば女神男神の兩峰巉然として空を刺せり。夕かげしげくなるまゝにやう〱姿かくれゆくもかう〱し。つとめてかろらかによ

そほひいてたゞきへのほる。峻絶なることたとしへなし。木の根岩かどをたどりてゆくこと一里ばかり、からうじてのほりはてぬ。さて見わたすに

はこね山關のこなたの八つの國たなそこに見るつ
くばねのみね

筑波嶺にのぼりて見れば八州の野わたる嵐わが袖
にふく

早春の詞

筑波根の高根のみゆきひま見えて、堤の小草青み

そめたるに、心おそき渚の葦さへ今はやう／＼に角ぐみわたれば、下根をあらふ水の煙もぬるげなるかたはらめ也。

山谷橋塲わたりの梢どもそこはかとなう霞み渡りつゝ、立ならびたる家々のほの／＼と見えがくれたる、走りがきの墨繪にうつせらむ心地す。

うすらひの解けて流るゝ隅田川霞める方や春のみなかみ

夜來の雨心地よう晴れて、なごりかすめるあけぼのゝ景色ばかりのどかなるはあらじ。浮世の塵動かすして蓬生の庭、玉を敷き、さへづりそむる軒

の雀も聲の濁りを洗ひ去られたらむやうに覺ゆるは心のなしにや、隣のおうなが目さむるけはひも聞えて、はや物賣るをのこどもの來る頃ともなるに、例にはかはりて、花賣るおぢの、梅のくれなゐ、梨の白たへなど溢るゝばかり籠にこきまぜて、よび聲いさましく行きすぎたる、よべの雨はまことこれなりけりと思ひ合はさる

よをこめて降りし野山の春雨の行くへを擔ふ花賣りのおぢ

かりそめの葎生なれど、きのふけふと住みなれぬれば何となうなつかしさのまさりくるもあはれ也。

まして年たちかへりぬれば、風なごみ霜とけ、痩せほそりにし冬木の柳も花田の糸打はへて、雪にしほれし山吹も淺みどりに芽ぐみつゝ、垣根の草さへいつしかとけしきだちて青みわたれるに、かたへなるひとともと梅の長く笑を含みつゝあるじ擇ばずこびかほなる、人見知りせぬ乳子にも譬へつべくてこれにぞいとなき心もすこし春ある心地はする。

ことしすむ蓬が宿に咲出でゝあるじ撰ばずこぶる梅かな

やれ庭の梅のかたえに我宿の春の色こそ動きそめけれ

ひと日降りくらしたる春雨のさびしきに、いぶせさ慰めんとて我妹子の琴かきならすものどかなり。颯々として身にしむは松風の通ひくるにやあらむ、琅然として心を淸うするは軒の玉水のしらべ合するなるべし。緩又急、斷又續、指底恨み湧き、舌頭悲みをのぶるに、文よむとも忘られて、そなたにのみ心引かれてあるに、やうやうしらべの、空にすみのぼる心地するに驚きて見出せば、天いつしか晴れ渡りて夕月のくまなく匂ひみちたるなりけり。優婆塞の宮の姫君のことども思ひいだされて、

空ゆく月もかげとゞむらむ

といひつゝ促せどつゝましうのみしていらへもせず、やう〳〵あるかなきかに、

招きつるむかしのしらべ忍びてや

と打出などしたるには日頃の徒然も忘られてなむ。

睦月なかの八日は母君のうせたまひにし日なれば、うからやから打つどひて淺草なる御墓に詣づ。かくれたまひしはきのふと思ふにはや七めぐりにもなりにけり。

苔路の露を見てはしげき其世のみめぐみを思ひ、かたへの柞をながめては今は空しき御蔭のみぞし

たはるゝ、　年華徒らに散りて學業未だならず、いつかは苔の下にも御心の行くはがり思はせ奉らんと思ふにも、今はと見えたまひしきはまで只おのが身の行末をのみもとながらせたまひし御面影、あざやかに浮び出でゝそゞろに所せき袖のしづくぞ人わろきや。

ことなくて今日たまゝつるおのが身をあはれ
とだにもおもほせよ君

いにしへにあふと思へば袖の露ぬるゝさへこ
そ嬉しかりけれ

親じき友の出雲へゆかんとするに忍ばすの池のほ

とりにて夕つかたより離筵を開くことあり。春とはいへど、夕風さえわたりて暮れかゝる空いとさむげなり。池の面は慘憺として愁ひのさゞ浪をよせところ〴〵むらがれる枯蓮の、入相の鐘に打そよぎたる、いはんかたなく物かなし。をりから列を離れたる孤雁の泣きわたれる、あはれ愁思をいかゞせよとにかあらむ。

君がゆく雲井のをちに鴈なきて夕浪寒し春のわかれ路

逗子の春色

とほく塵の世をのがれいでゝ松の風浪のひゞきに心をすますだにあるを日數のつもりぬれは知らぬ野山もおもなれてわれにしたしむ軒端の小鳥いとなつかしく清風苔のむしろを拂ひて墜露玉をしくも心ありげなるにそゞろに病の身にあるをもわすれて今更すみはなれなむ心地もせず、あるは霞にしらむ浪のほのあした、あるは浪路にきゆる船うたのゆうべゲーテ、ユーゴーのたぐひを又なき友に思ひむつびて花の都の春ひと月空しく詩卷のう

ちにをさめつくしぬ。

相州逗子の停車場よりわがすみける海岸までは只はひわたるばかりなれと山薄く草あさやかなる煙村のさまいとおもしろく、ことそきたる萱が軒端もやう／＼まばらになりゆくあたり、苗代かきをかすめつゝ一筋の小川はながる。光をふくむ緑波あたゝかにして、ちりてながるゝ一片の桃花たがいにしへの春をやたつぬる。けぶりいでたる兩岸の若草におちゆく水の末かすみつゝ、はてはとほの山々の緑にかよひたるもいとをかし。

　　うちかすむ野末の松の梢より
　　　　ながれていづる春の川水

こゝを少しくたどりゆけばやがて逗子の海岸なり。平波杳渺として、目路のかぎりきはみなく空や水なる沖のへに霞をのする蜑ぶねもいとのどやかにをり／＼黒煙くゆらして浪を蹴りゆく黒船も常のごとくはすさましからず。

　　そゝりたつ大黒ふねも一筋の
　　　　霞のみをにうかぶ頃かな

　　水や空空や海なるうたがひを
　　　　ときてわたるは白帆なりけり

右に翠雲の天をさゝけたるはこれ豆相の高峯なり。

左に神龍の勢をかたちつくれるはこれ名じまの巉礁也。而してみとりにかすむ東海のはて、縹緲として雲外にひるかへりたるば、これぞ芙蓉の高ねにあらずや。いたゞきの何となうかをれるは秀靈の氣のあつまれるにや、時に浮雲の徂徠するは仙客のあそびきたるなるべし。煙霞大麓にむして峭壁おのづから乾坤のきざはしをなせり。

　麓のみかすめる見ればくる春も
　　いゆきはゞかる富士のたかみね

神代より雪にみかける山なればもとよりいひけかすべき言葉もなけれど、雲風に姿定めぬ神嶺のけ

はひ今さらに目おとろかれぬ、ことにうらゝかなるあした夜を村山の上にのこしてひとりあけゆく絶巓のさまげにいはむかたなくめでたし。

　しのゝめの浪より明くと思ひしは
　　富士のみゆきのうつるなりけり

　しらみゆく高ねの雪をさす掉の
　　雫にかけてわたるあまぶね

江の島もまたはるかに見渡さる。ふじのねの下にあらはれて、たえずふもとをかすむるさま、空に知られぬ一團の黑雲に似たり。晴れわたりたる日なとは青松白沙あさやかに見えわかれてつらなれ

る山のたゝすまひなど手にとるごとし。

　はなれ磯の松のみとりもうすゞみの
　　繪の島かけて霞む春かな

　うつし繪を思ふ磯べのあけぼのに
　　一ふでくろし沖の島かげ

つれ〲なるまゝにひと日流鶯のゆくへを逐ひてそこはかとなく水郷の春をたづねぬ。路は海にそひたるかたそばを傳ひて柳色春を知れる孤村のうちにつらなれり。斜坡平隴の間に牧唱樵歌のたえ〲にきこゆるもいとのとやかに白雲のふかきあたり、かすかなる山窓の二つ三つあらはれたる、

はたこよなくをかし。道のべのうなゐに眺をかしきところはと問へば霞み渡れるをちの一村をさしつゝ答ふ。牧童遙指杏花村といふからうたの心げにこそと思ひだされぬ。

　つゞれまとふ賤がわらはも月花の
　　みやび心はかはらざりけり

柴の軒うばらがきひきつらなりて荒れわたりたる蓬生の庭見どころなきにゆくりなくかなたの藁屋に梅の花のさきのこれるを見出したるまたなくうれし。

數ならぬあまが苫やとおとしめし
軒端ににほふ梅の花かな

長く笑をふくめるさまわがおもてを知るものゝ如く清香の袖をしたひくるもげになごりをしき別れ也。行くこと半里はかり、こゝを森戸の浦といふ。眼界にはかに開けて前には相摸灘の蒼波はるかに豆州の翠巒をうかべ、岸とほからぬところには名島の島嶼點在して白濤たえまなく危岩をかめり。今日は風なぎて浪平かなれば潮ひたるまゝに貝とらむとてこの島におりたつもの數いと多く、あるはくれなゐの袖ふりはへたる都びと、あるはみる

の如き髪うちたれたるあまの子ら、長き小き籠をひきさげつゝ、おのかじゝあさりありくさま、見るからむすぼるゝ胸もはれわたる。

あさりするをとめが玉のかひなには
心かけてもきよる浪かな

わたの原沖をふかめて立つ春に
浪もよせくる梅の花貝

浪うちあらふ磯もとなどに唯かりそめにすみなせる苫やのさま、一陣の浦風ふきなばやがて飛びもうせぬべう見ゆるを、住む人の心やいかにわびしからむなど思ひやりつゝゆくに、かたへの清流鴎

を洗ひて更にこしかたの遠きをおぼえず、夕日やう／＼傾きかゝりてくまなくてれる夕榮えいとまばゆきまで也。

海原にあまる光は朝までの
ひまより入りし日影なりけり

風全くをさまりて閑鷗の翅のほかの白波もなく海上たゞますみの鏡をかけたる如し。

ゆき／＼て長者が崎にいたり、遂に旅館長者園にやどる。青松のかげ清くして香風のいとすゞしきところあまのよび聲長く波にひきて蘆花の浪にむつるゝさまげに心ゆくながめ也。暮雲をさまりは

てゝ明星の光さやけきところ、しづかに夕月の影はのぼりぬ。水面しろがねの色にいでゝ龍王玉斧をとぐに似たり。

浪の上にくだけずやどる夕月の
かげのとかなる春の海かな

夜に入りては浪聲枕べにくだけて露分衣いとゞしほたるゝ心地す。

岩ゆする浪のひゞきも心から
おちゐてきけばさびしかりけり

旅のなぐさ

ことし八月のはじめつかた越の國の歌まくら見むとてあづまのみやこを出でたつ。熊谷、深谷、本庄などのうまや〳〵をすぐればやがて上つ毛のさかひなり。妙義山、榛名山などみぎりひだりに打ながめつゝゆくに、今まで所せかりしあつさもなごりなう忘られて涼風ひとへの袖にしみわたるはいつしかひなぐもり碓氷の嶺にもかゝるめり。

のぼりゆく百のたもとにわかちても

なほあまりあるみねのすゞ風

この夜長野にやどりて、またの日の夕つかた、こともなく越後の新潟なる父君の家に着きぬ。父君を始め奉り叔母君姉君など喜びたまふことかぎりなし。海やまの珍しきものとゝのへてねもごろにあるじまうけしたまふにうらなくものがたりなどして夜のふくるも知らず。まことに天倫の至樂、王侯も易へじとやいはむ。

みめぐみの深さ高さとけふよりは
なかめてあらむこしの海やま

是市の名どころ見むとて姉君のしるべしたまふまゝに、ひと日、白山の公園にゆく、信濃川とほじろくながれていづこをかぎりともなし、川のあなたに打ならびて高うあふがるゝは彌彥山と角田山となり。

信濃川とほくながるゝ久方の
　雲井にたかし角田いやひこ

新潟をはなれて東北のかたに海べたをつたひゆけば三十里ばかりにて寐屋といふ所あり。知る人の住むところにてもあり、かつはいみじうけしきすぐれたるさかひなりと

きゝて船にてわたりゆく。奇岩亂礁のたゝずまひめでたしともめでたし。伏したるは遊龍の如く、うづたかきは蹲虎の如し。あるは尖れる、あるは平なる一々方物すべからぬなかに、直立數十丈巉然として大空を穿つあり。名けて鉾立て岩とぞいふ。形の似たればなるべし。

あら浪のひゞきもそひてほこたての
　岩もとゆすり大鷹のなく

そのわたりの山などのほるになでしこの花いとさかりなり。口にまかせてざれ歌ひと

つものす。

わきもこといざ寐屋のさときて見れば
　ならびて咲けり床なつの花

こゝより五里はかりへだてゝ溫海（あつみ）といふ溫泉（いでゆ）あり。いとすゞしきところなりといへば車にのりてゆく。ゆきつきて見ればげに人の言の葉にたがはず。

いづる湯のあつみの里は名のみして
　袂にすゞし山おろしの風

わがやどりける家よりは溫海獄たゞ目の前に見渡さる。あさな〳〵起き出でゝ打向ふこゝちげにいはむかたなし。

あさな〳〵手洗ふ水にむかつをの
　木々のみどりをむすぶやどかな

こゝはいにしへ人げもあらぬところなりしが、病みたる鶴の、ある時この出で湯におりたちてやがてさわやきけるより其名四方にひろごりきとかや。

とめきつゝ湯あまむ人にあしたづの
　千代わかつとておりたちにけむ

さて十日あまりすぎてまた新潟にかへりきて、さて父君母君にわかれたてまつりてあ

づまのかたにむかはむとするほど、何となく物がなしく、あかつきの露はらはぬさきに旅のころものはやしほたるゝもしのびがたし。

また來むと思へどかなし信濃川
川風あらく浪さむくして

續都の手ぶり

新橋停車塲

草よりいでゝ草にいるとは民ぐさのしげからんさがにやありけむ、咲く花のにほふがごとくとは今のうへをしもいふべかりけりとおぼえて、こしかたにためしなく、ゆく末もたぐひあるまじきはげにあづまのみやこになむ。赤駒のはらばひし田ゐも玉のうてなにみがきしつらはれ、水鳥のすだきし澤もさくらやまぶきのはなぞのにつくりかへら

れしにつけても、おのづからうつりかはる世の姿の思ひ知らるゝに、わきて人々の手ぶり國々のならはしなどとりあつめて見る心地するはあたらしき橋とよぶめるわたりなり。けぶりぐるまのゆきかへるところとて人々のつどひくることよるひるわかず、そこに、ていさ塲とかいひて高やかなる家ゐたてり。いとひろうつくりなしたれど見わたすかぎり人ならぬくまもなし。をのこをみな、老ひたるわかき、あるはたかき、あるはみじかきおのがじゝたびのよそほひしてのゝしりさわぐ。はしらかべなどを見るにひとつらに廣告といふものつ

らねわたしたり。あきびとの、おのが家々にうるものをひろう世のひと〳〵に知らせんれうとか。紙あるは板などのうへにくさ〴〵のかた書きたる、いとをかし。しんぶん、きぬ、くつ、調度、けむり草、はたごやのなどぞことにおほかめる。作りものかたりにある鱶七、三國史に聞えたる關羽、わたつみにすむといふなる猩々の酒がめのめぐりにまとゐしつゝたらひのやうなる盃とりあげてさかみつきするかた書きたるはおほみきあきなふ家のとか。ほゝこけ、まみおちいりて手足糸よりもほそうやせたるぼうざの、ひとふくろのくすり飲みてす

まひとりといはむにも足りぬへくこゑふとりたるさまうつしたるはさるくすりみせのなりけり。鬼ふたりみぎひだりより草履の緒をとらへたるははきもの賣る家のなるべく鬟そそげかしらはげたるをみなのたちまちにいとつや／＼しうふさやかになれるさま見せたるは髮のあぶらあきなふ人のなるべし。あるはざれたるまめやかなる、あるはこちたきあは／＼しきなどとり／＼にたくみをつくしたる、さのみはいかゞかきつくさむ。かゝるほどにおびたゞしう鐘の鳴りわたるに、ひと／＼ゐわたゞしうかなたにいそぎゆく。けぶりくるまの

いまいでんとするなるべし。ひとり／＼切符といふもの買ふめり。白きは一のきざみ、青きは二のきざみ、赤きは三のきざみとか。など地下の色のたかうしてゆるしの色のいやしきならむといといぶかし。やまのごとき人の、ひとつの道より車のかたへとゆくに、われこそまさきにと爭へば、おしあひつゝ、足ふまれきぬけがされなどしてらうがはしさいはんかたなし。若うさかりなるをのこのかたちきよげに、けはひよしありて見ゆるを送りすとにやあらむ、母なる人の車のとにたちてなごりをしう、なみだをひと目にうけて見やりたる、

いといとほしうあはれなり。おほやけのおほせことによりて外つ國にものまなびせんずるがくせうやあらむ。とほく海やまをへだてたるさかひなればうしろみむ人もあらじまたかへりこむまでは心をとめて、つゝがなうあれかしなといふ程もいと忍びかたう落ちかゝれば、さすがに人わろくや思ふらむ、まぎらはしつゝゐたるけしき、よそのみるめも心ぐるし。かたへに腰かけたるは年のほど同じばかりなるをのこの色くろくまみするどく八といふ文字かきたらむ様なる髭いかめしう生ひさせたるが、めにやあらむ、となりなるをみなとい

とむつまじうものいひかはす。けふは江の島を見、鎌倉の里にやどりて、あすは清見がた興津にいたり、かへるさには箱根山のいてゆをあみ、こゆるぎの磯わにたびねせんなどかたる。さるはこのころ世の中にいひはやすめる新枕のゝちの旅路なるべし。くるしげにさまよへるばうざをいたはりて今しばしなり、ゆるぎいでなばやがてふるさとにつきたまひぬべし、すこしばかりの程ねんせさせたまへやなどいひなぐさむるむすめあり。あはれいかなるやまひにかあらむ。又げいさとかいふうかれめのたぐひのものあまたひきつれて、はかな

きざれごといひしろひつゝ花やかにわらひたわむるゝもあり。あが君〳〵とかしづかるればおのづからきんだちめかしてわれはかほに打ふるまひたる、さるあやしきものにたぶらかされて家をも身をもうしなふをしらぬぞあさましき。あき人にやつかさ人にやこがねの時計もたるをあぎとの玉にても得たらんごとく思ひなしてほこりかにわざとひらめかしたるはいとけにくゝ、いづくの外つ國びとにかあらむ、ひげのなかよりさしのぞけるやうなる口に、くぶり草くゆらかしたる、春の野の野火かとしもぞおぼめかるゝ。かなたの隅にはゐ

なかびとの、はだの色南蠻のくろがねにも劣るまじきが、だみたるおほ聲にあなまちどほし、心ながき車にもあるかな。あはれけさつとにとて買ひつるいをのほとびつべきものをなどいういうさうの手をのべて、あくびうちして腰なるけふり草入れたる革ふくろとりいでゝ、とかくして、ひと吹、ふたふき、さてすひがらをたなそこにまろばして、その火をまたうつして吹きなどするほどに、ひり〳〵といふ笛のねきこゆ。よろづとゝのひたればにやあらむ。ひと筋の黒烟りたなびけて車はのどのどとゆるぎいづるにうしろのかたより今しばし

〱とさけびつゝふためきまどひ、ひたばしりにはしりきてのらんとするを、うまやとりまかなふ人にひきとらへられて、手まどひしつゝ、おめおめとひかれゆくさまをこがましけれどかつはいとほしげなり。今出でぬと見つる車の、つゆのまに雲霧にへだてられて見えわかずなりぬる、風よりもすみやかに、矢よりもはやく、ちはやふる神代にありきてふ天のとり舟もかくやとおどろかれぬ。かくするほどにこたびはかなたよりかへりくる車の、やう〱ちかづくまゝに、しづやかになりてはてはとゞまりぬれば人々車の戸おしひらきてむ

らがり出づ。つゝそで着たるつかさ人、赤きけつとかつぎたる賤の男、紺のいろなる前垂れかけたるあきびと、苔のころもの法師などこきまぜにいそぎゆく。かくてていさ場を立出でぬればおのがじゝ西に東にわかれちりて、またかげだにもなし。かく人々の集りてわかれ、わかれてつどふことひと日にいくたびといふことを知らず。行くもありかへるもあり、知るもあり知らぬもあり、逢ひてははなれ、はなれてはあふなるこのわたりのありさまを見ば、蟬丸ならずともそゞろに世のはかなく定めがたきに打ひそみぬべし。

日本橋

新橋よりは程とほからぬに、日のもとの橋とかいふところあり。げに名におへるもしるく、わが國のさかえをひとゝころにあつめたらんこゝちして賑はゝしくさかりなるさまたとへんにものなし。大江戸のまなかにして國々の道のほどもみなこゝよりはかり定むとか。東は海づらにつらなりて北は淺草のさと上野山にちかく、西はすめろぎの御門たかう仰かれて南には富士のねの雪、雲ゐはるかに見わたさる、橋の長さはたちあまり八間、短かしといふにはあらねど、音もとゞろにわたりゆ

く人のしげさにあゆみの板さへ見えず、橋のしたには百ぶね千ぶねむやびあひて、帆ばしらのしげき林の梢の如し。出船あり、入船あり、のぼりぶねあり、くだりぶねあり、あるは神風のいせ船、あるはしらぬひのつくしぶね、あるはしなさがる越のふねあるはおしてる難波ぶね、あるは天竺のだるまぶねまでかく打なびきよりつどふを見るにもげにかしこきすめらきの御稜威ぞ思ひしらるゝや。おのがじじ、岸べに板橋めくのものわたして荷などはこびあぐ。みつぎもたらし來れるにもあるべし。岸べにはかゝるものをさめん料に、藏と

かいひてぬりごめやりのものすきまなう並みたてり。すべてこのわたり土ひと桝をこがねひと桝に換ふてふばかりのところなれば住みたるあきびともひとりだにまづしきはあらず。家ゐなども棟たかうつくりつゞけて屋のうへの瓦。大空にたつ浪かとぞうたがはるゝ。家ごとにあきなふ品ところせうつみかさねて、あきなふをのこ、あるはわらべなど端ちかうならびをり。まらうどの入りくるを見れば、よくぞおはしましぬる、度(たび)まねく厚き御なさけにあづかるなんいとありがたきやなど口さかしくいひつゞけてあまたゝびぬかつきなどす。

そろばんといふものぱち〳〵と音たてゝ、これは何圓かれは何圓などいふに、まらうど、そはいとたかし。今すこし引きねなどいへば、あらずわが家の品はこと家のとはかはりて正しうすぐれたるものゝみ撰みおきたれば、よしあたひは尊からんも品のうへにあやしう腹ぐろきわざしたるはなし。下ざまの言葉にも品下れる物買ふ人の錢(あし)失ふとかや申ことはべらずやなどいひて花やかに打笑ふに、まらうども心とけて買ゆくめり。かくて時のまに數しらぬ人々をおくりむかへてあきものすればひと日のうちにたはやすくちゞのこかねをも集めえ

なんかし。又大路のかたへにひた土に藁ときしきてくさ〴〵のものあきなふもあり。からのやまとの古びたるさうし賣るふみあきびと、煙り草の袋錢いるゝ袋。紙入れ、さいふなど賣る革あきびと、はらはた見えたる人形をすえてこと〴〵しうやまひのことといひたつるくすしなどぞことにおほかめる。大路のまなかに長うひきわたしたるまがね路のうへを走りゆくはてつだうばさとかいふ車なり。いにしへの物見車二つばかりよせたらむを馬にぞひかすなる。また圓太郎とかや、人めきたる名に負へるもあり。同じさましたれどやゝさゝやかに

きたなげなり。をのこをみな、ところせうのせて、馬逐ふをのこの、屋根よりかね鳴しつゝおうなよ、おきなよあなあやうし、はやうところ去りねなど高らかにさきおひて馳す。あるはたぢからぐるまに參ゐりゆくもあり。あるはふた輪ぐるまをめぐらすもあり、花のそで柳のたもと、たてぬきにゆきかふこのわたりのさま、げに都の錦ともながめられてあづまの名どころ多かるなかに、とりいでゝ繪にもかゝれ口にもいひはやさるゝことも、ことわりに思ひしらるゝや。この橋わたせる川の北なる岸をうをがしとぞよぶ。よろづのうをあきな

ふところなればなるべし。みやこびとがをし物にするも皆こゝよりもちきたるなれば、いつとなうたえまなく、いそがはしきなかに、あしたゆふべぞことに賑へる。家々の前には板あるは籠にくさ〴〵のうをおきならべたり。みちのくのまくろ、北の海の鮭、芝うらのえび。玉川のあゆなどこゝら見ゆ、そのほか數しらぬはたのひろもの、はたのさもの、いかゞ數へあへんやは。かたへなるすゞきを見ては秋ふく風にうたひけんふるさとのなますも思はれ、かなたの鯛をし見れば春の日に絲たれにける浦島がむかしも忍ばる。夏やせにしる

しありてふむなきは石磨にくはせまほしく、みさかなにしつべきあわびはたがおほ君を待つにかあらむ。鮪は名をきくだにねぢけたる臣(おみ)思ひ出だされておそろしく、鮒は師直がのゝしりけむことばとてさまにくげなり。になき毒をかくしながらさりげなうしらず顏つくれるふぐのかたはらにはおそろしきかほしたれど、心はおほどかにほけ〴〵しきたこもあり。そもしろたへによそほふものから腹ぐろきいかはいとあさましきに、かしらは下(しも)部(べ)だにくはざりけむかつをの、さうなく時めけるなど、おのづから官(おほやけ)の海およぐなる世の人のすが

たをしめさずや。あるは、ひと、ふた、みよ、とうをの數よむもあり。あるはうりかひのあたひいひしろふもあり。いつこもみ丶かしがましうよびかはせるさま、絶えずいさかひをなせらんやうなり。ことに夏のはじめかつをのあまたとらる丶頃魚うりのちまた〱を聲高うよびありくに、たかきは更なりたづきなきわびびとさへたくわへたる衣とりいで丶あしいくらとておぎのりかりてだにもとめつ丶くらふを見るにもげにあづまびとのほんじやうのいさましく心きよきに打ゑまれてなむ。

歌舞伎座

むかしお國とかいひけむ浮れめの出雲の國よりいできて、たはれたるくさ〱のわざしたりけるなごりを、ちかく芝居とかよびて世のなかゆすりてもてはやすめり。そのかみはたゞ道のかたへの芝生などのうへにて人々に見せけるならむを、今はそのわざすべき家ゐをたて丶たぐひさへ多うなりもてきぬるや。その家ゐを座とかいひて君が代の明かに治まる座、わぎもこがころもはるき座、松のみどりのときは座、山の井のあさくさ座、霰うつあらたに富める座、さす竹の宮戸座、いなむしろ川上座など數しらずあれどことにかくれなきを

畠つものかぶき座とぞいふ。石もて高う外つ國ぶりにつくりなせり。家のうちもきら〳〵しうみがきしつらひて、わさをきのわざする板じきより人々の物見するさずきまで、ひろやかにいかめしきは、みつ葉よつばの殿つくりといふともいかで及ばむ。いまするわざは忠臣藏とかいひていたうかみしもにもて興ぜらるゝものなればあけはなるゝ頃より人多くつどひきてさしも大きなるにはも錐たつるばかりのひまだになし、おばしまにかけわたしたる毛氈は時ならぬ龍田山のもみぢを見るがごとくなるに、人々打くつろぎて寄りゐつゝ、を

ほみき、くだものなどとりくらろめり。かくするほどにはうし木のをとかち〳〵と高く鳴るなべにむかひなる幕の開けゆけば、人々けしきだちてあからめもせずそなたのみ打まもる。ことにわかうさかりなるをみなの、ふところかゞみとうでゝまゆつくろひ襟合せなどしてれのが心ひくわざをきにうつくしう見えんとさうぞきたる、いとをこがまし。とみれば、正面の板じきには山里のさまつくりなせり、こゝに老いさらぼへる賤の男と見ゆるをのこのいづこより得たるにかあらむこがね五十(いそ)ひらもたるがいとうれしげにいこひゐるを、ゆ

くりなう、うしろの藪より山だちあらはれて大刀もて斬るに、何かはあへむ、見るがうちにはかなういき絶えぬればかの山だちやをらこがねうばひとりて立ち去りなんとす、折から鐵砲のおとひゞくよと見るほとに山だちそのところに打倒れぬ。志ばしありてかなたよりさつをひとりはしりきてかの老いびとのなきがらにつまづきてふと見ればこはいかにおのが父なりけり。さはわが射つるよと思ひあやまりて打あざむことかぎりなし。物もおぼえず心みだるゝけしきいとあはれに見ゆるほど、廻り舞臺とかいひて板じきののど〱とめぐ

りゆけば山里のさまかくれていぶせき賤が家あらはれぬ。おくまりたるかたにかのさつを打しほれつゝ物思ひをるかたはらにめにやあらむ、をみないみじうかなしげに打伏したり。親をころしたればいかにつゝむともみほとけのとがめなどてのがれむ。おのれもものゝふの心だましひあり。いひがひなうおほやけにとらはれんよりは、心きよく腹かき切りてむなどいへば、をみなたへがたう泣きしづむ。とかくして、はて〱は大刀さかしまにとりなほしてつと腹につきいるゝにこを見る人々かなしむことかぎりなし。髭いかめしう生ひたるを

のこだに鼻打かみなどするにまして是わざをぎに心よせたるをみなどもはまみ赤う泣きはらして人ごゝちもなし。あなあはれ、かの君ころさんはいといとほし、ことならばわが家のかたくなしき父にこそ代へめなどさへわかきをみなはいふとかや。ひと夜落語(ものがたり)する人のかたりしも思ひ出されてをかし。かゝるほどまたはうし木の音して幕を蔽ふ。ひまよりかいま見れば死につと見つる人のむくむくとおきあがりて奥つかたにかへりゆくもおどろかるゝに今までをみなのさましたるが忽ちしりかゝげ毛脛あらはして、はしたなうあらゝかにあゆ

みゆくもいとあさまし。さておのがじゝつぼねにかへりて湯あみ、白きものつけなどして又くさぐさのさまにつくりなし、おなじすぢなるわざ見すれば人々打興ずることかぎりなし。されば都は更なり鄙までもこのわざとほくひゞきわたりてしらぬひの筑紫びといさなとる北の海のあまさへふりはへ、見んとてきたるもあり、さらぬもかたちうつしたる錦繪にながめつたへて、見ぬおもがげに人しれず心うごかすも多かりとかや。

淺草の里

推古のみかどの、あめのしたしろしめしたまひし

御頃、ひのくまの濱成武成のはらからが網にかけたてまつりし觀世音、苫ふきかけしそのかみのはかなうわびしげなりしおんすまひにひきかへて、今は四方何十間といふばかりなる御堂の樣いときら〳〵しう、あめのしたにたぐひまれなる靈場とあがめらるゝもげにことはりになむありける。ゐなかびとが都めぐりには、まづ足をこの地にめぐらし、あづまにしき繪あきなふいへにもいづれかこゝのさまかきたるをかゝげぬはなし。こむ日曜にはこの里にゐてゆかむなどいへばむづかしがりしうなゐ子も涙を止め、遠きひななる賤の男もこ

ゝを見きてふ事をこよなきめいぼくとは思ひ入りためり。てつだうばさのとゞまるやがてくるまのをさだつものゝ、あさくさよ〳〵とよぶまゝに、おりてゆく。みつぐりのなかみせとかやいふは、れんがといふ石もてたゝみたる家居なり。うちならびてつゆばかりのすきまも見えず。ふつ〳〵と銃うつやうなる音たかうきこゆるは、まめを煎るにやあらむ。かぐはしき香の風につれてかをりくるは名にたかき紅梅やきをうるなりけり。をとめらがかざし賣る家、わらはべのこまあきなふいへ、うばそくが數珠のくさ〴〵ならぶる家、あるは志

やしんとかいひて人のすがた、さながらに、うつしとる家などひとつらにたちこみていとにぎはゝし。うまごの手ひきてほゝゑみつゝゆくおうなもあり、きりさげとかいふかみのうしろすがたいとよしありて見ゆ。たがなきあとをとむらひしかへるさにやあらむ。たはれめとうちつれてゑひしれてあゆみゆくをのこもあり。をむなのいふまにまにそこゝのみせに入りて數多くもの買ひあたへたるは、しどけなき心のほどもあらはれていと見ぐるし。あるはおひたる、あるはわかき、あるはいやしき、あるはたかき、おのがじゝきようきか

ざりて心やすげにねりゆくにもまづのどかなる御代のめぐみぞおもひいでらるゝや。おそろしうにらみたまへる山門の二王におほきなるわらんじさゝぐるもあり。いかめしき平内のやしろにぬかづきゆくものもあり。鳩に豆くるゝわらべを見てはたらられねとあそびきにしいにしへこそ忍ばるれ。本堂の前を左のかたにゆけばこゝは奥山となむよぶところなる。くさ〴〵のめつらしきもの見せ、あるはわざおこなふ家數多くなみたちて、かねつゞみのおとかしましきまでなりひゞきたり。こなたのはしにけだものゝかたかきたるをたかうかゝげ

たるはこのころ世にいひはやすめる花やしきなり。うちむれてゆく人々とともに入りて見る。名におへる花よりも、なか〳〵にとりけだもの丶かたをば打興ずめり。くろくまの爪さがだて丶、をりのくろがねにとびか丶れるはふるさとのあら山中をしたふにかあらむ。くさりしてつながれたる猿のかなたこなた、はねありきつ丶人のくる丶食物取らむとするに、かしこまりせよ、さらばなどいへばかしらひくうさげて手を耳のほとりにさしつけたるいとあいぎようつきてをかし。かたへにははゞみの、ふとさ松のみきばかりなるがあり。め

のうちきらめきておそろしきさへあるにのど〳〵とうこめきてはひありきてをり〳〵くれなゐの舌はきたる、見るから身の毛もいよたつ心地す。ひと〳〵のやまのごとくうちかさなれるはなにかとちかうよりて見ればこは名にたかき狒々なりけり。そがさま猿にいとよう似たり。いかなるもの丶心あるにかあらむわかきをみなのたてるを見てはいとしたはしうこひしげに打ちながめつ丶男などのたはむる丶をりはねたましう腹たて丶、いかりくるひつ丶土などうちなげたる、見るからあさましうあはれなり。ひところゑたかうひゞきくる聲

のいとおそろしうきこゆるにおどろけばこれなむむかひなる虎のほゆるにぞありける。口打ひらき牙いからしおそろしうにらみたるまことにけだものゝ王とやいはむ。時のまに千里をはしる身の、ほどもなきをりのうちにつなかれぬる、心あらはもゝうちてなげきやすらむ。あるは鹿、あるはやぎ、あるはつる、あるは、をし、そのほかあまためづらしき鳥けだものをあつめたるには人々くるゝ日のわづきもしらであそびくらしつべし同じ園なるいつゝがさねのあらゝぎにはちくおんきといふものすゑたり。人の物いひ、糸たけのねをまで

たくはへて人にきかするなりけり。火をつゝみ風を捕ふるまぼろしのわざもものかは。あとなきおとをとゞむるこそげにあやしさのかぎりならずや。人々のつどひくるまゝにいまぞ聞かせそむ。辨慶が打よみけむ勸進帳いとたかうきこゆるはこれ成田やのこわねなるべし。師直がまが〱しきことの葉のさやかに響きくるはこれ高島屋のにまがふべくもなし。沖のくらきに白帆が見ゆるあれは紀のくにみかんぶねと、いとらうたくなまめかしき聲してきこえたるはこれよしはらの里にならびなきたはれめの歌なりとか。こをきく人々只まさめ

にあひたらむこゝちしてうつしごゝろもなし。やがてことはてぬればいざさきより開きたまひしきみはあとなる人とかはりたまへとよぶに人々なごりをしう、とのものかたに出でゝゆく。と見ればかなたに空をうがつばかりのうてなあり。雲をしのぐたかどのとそよぶなる。いかめしううるはしくたてなしたる、よのつねのたくみともおもはれず。のぼりゆくまに／＼今まで高しと見つる家々のやう／＼ひくう足のもとになりゆきたる、あまのとりぶねにのりゆくかとうたがはる。ひときざみ、ふたきざみとかぞへつゝはやとをまりふたき

ざみの上にもいたれば四方くまなく見えわたりてさばかりひろきみやこのうちたなごゝろのうちにゆびさしつべし。おほぢゆきかふ人々のさま蟻のはへるが如く、たちならびたる家々はまつちの箱ふせたらむにも似たり。東京灣もたゞ一寸ばかりなる盃かと見え、すみだ川ひとすぢの帶うちはへたるかとうたがはる。なにがしのうたびとが手に星辰も捫すべしといひけむ、そゞろに思ひいでられてをかし。さて打くだりてゆくにこゝよりさきはくさ／＼のめづらしきわざ見する家たちつゞきたり。あるは玉しきの都をどり、あるは蘆がちる

浪速をどり、あるはみはかしの劍舞をどりおのかじゝふゑつゞみふきたてゝ人々をよびかはしたるいとらうがはし。わらはべあまたみづらゆひからめきたるしやうぞくして大きやかなる玉にのりたるはこれ玉乘りの藝とぞよぶ。心のまゝにあなたこなたゆきかひ、高きところにまですら〳〵とのぼりゆくいとたくみなり。物のね花やかににぎはしうしらべあはせたる、ことに目だちたり。また珊瑚閣とかいひて、めづらしうおとろくばかりなる珊瑚をつらねて見するあり。あるは海のそこひのたびちとてくさ〳〵のいを、みるめなどならべ

おきてあだかも浪のしたゆくこゝちせさするもあり。とり〳〵にをかしくめでたきさまいかでかおろかなる筆にかきつくすべき。こゝをすこしすぎゆけばぱのらまとかよぶめるものありいとひろうたかうつくりなせる家の戸をくゝりゆくにくらうして闇のごとし。やがてひろやかなるところに來るに、と見ればあたりはみなわが國と、もろこしとたたかへるさましたり。砲の口より白う烟のわきいでたるは今やあめつちのふるはむばかりの音するかといとおそろしく、ひと〳〵の血あえなかれて道のべにあふれたるはまことにきぬをさへた

ゝよはしつべし。つるぎかざしてすゝみゆくもあれば、つゝ打すてゝにげゆくもあり。いたでおひてたふれたるも見ゆればあたとあらそひてまけかちのさだまらぬもあり、あるは馬の下にたふれたるあるは首打きりてほこらしげなる、まさめにいくさの庭にあるこゝちしてなまぐさき風袂にふきくるが如し。いにしへの百濟の川成がたくみもいかでこれにはとおもひいでらる。さて立出でて見渡せば夕日花やかに西の山のはにかゝりて淺草寺のかね木のまをもれきたるに人々やう〳〵わかれちりつゝ、はては夕ぐれの空に三つ四つ二つから

すのかげのみうちのこりたる、いとさびしうあはれなり。

（完）

美文韻文 霓裳微吟 終

明治三十六年七月十六日印刷
明治三十六年七月十九日發行

霓裳微吟
定價金參拾五錢

著作權所有

著者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　武島又次郎

發行者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　大橋新太郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

博文館發兌美文

- 文學士大町桂月君著 美文韻文 **黄菊白菊** 全一册 小判 紙皮上綴 四〇二頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 文學士土井晩翠君著 美文韻文 **天地有情** 全一册 小判 洋布上綴 二三〇頁 正價貳十五錢 郵税四錢
- 文學士鹽井雨江君著 美文韻文 **暗香疎影** 全一册 小判 紙皮上綴 三五四頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 國府犀東君著 新躰詩集 **花ざくろ** 全一册 小判 洋並綴 二五六頁 賣價拾五錢 郵税四錢
- 佐々木信綱君、印東昌綱君合著 美文韻文 **磯馴松** 全一册 小判 紙皮上綴 四一二頁 正價貳拾八錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 散文韻文 **雪月花** 全一册 小判 紙皮上綴 六二六頁 正價參拾五錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 散文韻文 **深山櫻** 全一册 小判 紙皮上綴 七〇二頁 正價四拾錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 散文韻文 **藻鹽木** 全一册 小判 紙皮上綴 五九〇頁 賣價貳拾五錢 郵税六錢

新體詩書類目錄

- 與謝野鐵幹君作 **うもれ木** 全一册 小判 紙皮上綴 二六八頁 正價貳拾五錢 税税四錢
- 大橋乙羽君著 彩色木版密畫挿入 **風月集** 全一册 小判 洋布上綴 四二二頁 正價參拾五錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 **歐米名家詩集** 全一册 中判 洋並綴 六〇二頁 正價參拾錢 郵税六錢
- 佐々木信綱君編纂 **竹柏園集**第一編 紙皮 小判 上綴 五一六頁 正價參拾五錢 郵税六錢
- 佐々木信綱君編纂 **竹柏園集**第二編 紙皮 小判 上綴 五五八頁 正價參拾五錢 郵税六錢
- 中邨秋香君著 **新體詩歌自在** 全一册 中判 洋布上綴 八三四頁 正價壹圓 郵税拾貳錢
- 大和田建樹君著 **新體詩學** 全一册 小判 洋並綴 二二四頁 正價拾五錢 郵税四錢
- 西村醉夢君著 美文韻文 **創作要訣** 全一册 中判 洋並綴 二〇六頁 賣價拾貳錢 郵税六錢

博文館發兌文藝

● 時代管見　文學博士高山林次郎君著
全一册皮上綴 小判五二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

● 文藝評論　文學博士高山林次郎君著
全一册紙皮上綴 小判四八〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

● 警世評論　ドクトル岡崎遠光君著
全一册紙皮上綴 小判四二六頁 賣價貳拾錢 郵稅六錢

● 透谷全集　北村門太郎遺稿　星野、島崎、平田、戸川四君共纂
全一册洋並綴 中判八六〇頁 正價壹圓六錢 郵稅拾錢
▲特製本 洋布上綴 正價壹圓參拾錢 郵稅拾八錢

● 文藝小品　內田不知庵君著
全一册紙皮上綴 小判六一〇頁 賣價貳拾五錢 郵稅六錢

● 龍吹鶴語　國府犀東君著
全一册紙皮上綴 小判二六四頁 賣價拾五錢 郵稅四錢

● 大紘小紘　文學士大町桂月君著
全一册紙上皮綴 小判四二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

● みだれ箱　齋藤綠雨君著
全一册紙皮上綴 小判三七〇頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

評論書類目錄

● あられ酒　齋藤綠雨君著
全一册紙皮上綴 小判四六五頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

● わすれ貝　齋藤綠雨君著
全一册紙皮上綴 小判四四六頁 正價參拾錢 郵稅六錢

● 雅三俗四　石井研堂君著
全一册紙皮上綴 小判二〇〇頁 賣價拾五錢 郵稅六錢

● 小文章　紫山川崎三郎君著　古人今人孰是孰非　風雲月露大珠小珠
全一册紙皮上綴 小判三〇四頁 賣價拾錢 郵稅四錢

● 月の光　谷信次郎君著
全一册洋並綴 小判二八〇頁 正價拾八錢 郵稅四錢

● 新文林　大和田建樹君著
全一册洋並綴 中判四三二頁 正價貳拾四錢 郵稅六錢

● 雨絲風片　文學士笹川臨風君著
全一册紙皮上綴 小判二三六頁 賣價拾五錢 郵稅四錢

● 溪韻松聲　呦鹿庵主人著
全一册紙皮上綴 小判二八〇頁 賣價拾錢 郵稅四錢

博文館發兌袖珍

- 大橋乙羽君著　**初子集**　彩色木版密畫挿入　全一冊 洋布並綴 小判 五九六頁　正價四拾錢 郵稅六錢
- 大橋乙羽君著　**若菜籠**　彩色本版密畫挿入　全一冊 和本並綴 小判 三二〇頁　正價貳拾八錢 郵稅四錢
- 大橋乙羽君著　政治小說　**累卵の東洋**　全一冊 洋並綴 小判 二〇六頁　正價拾八錢 郵稅四錢
- 饗庭篁村君著　**聚寶盆**　全一冊 紙皮上綴 小判 四九二頁　賣價貳拾五錢 郵稅六錢
- 巖谷小波君著　**女波男波**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 六二二頁　正價四拾錢 郵稅八錢
- 巖谷小波君著　**笑**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 五三八頁　正價參拾五錢 郵稅六錢
- 江見水蔭君著　**戀**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 三八二頁　正價參拾錢 郵稅四錢
- 江見水蔭君著　**星**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 六八四頁　賣價拾五錢 郵稅八錢

新作小說書類目錄

- 江見水蔭君著　**月と梅**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 三六二頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢
- 江見水蔭君著　短篇小說　**避暑の友**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 三八八頁　正價參拾五錢 郵稅六錢
- 江見水蔭君著　鐵道小說　**滊車の友**　寫眞版十六葉挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 四六二頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- 江見水蔭君著　軍事小說　**突貫**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 三八八頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- 尾上新兵衛君　軍事小說　**戰塵**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 三七〇頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- 押川春浪君譯述　**海庭軍艦**　全一冊 紙皮上綴 小判 三三九頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- 押川春浪君著　英雄小說　**武俠の日本**　全一冊 洋並綴 小判 四八二頁　正價四拾錢 郵稅六錢
- 福地櫻痴君著　**山陰麒麟**　寫眞銅版挿入　全一冊 紙皮上綴 小判 四六〇頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

文學士羽衣武島又次郎先生著

霓裳歌話

武島文學士の文學に深く措辭に妙なるは既に江湖の知悉する所本書は著者が過去數年間に於ける歌に關して發せる意見を收輯して一卷となしたる者議論あり、叙事あり、隨筆あり、史傳あり皆此れ山の峨々たるが如く水の洋々たるが如く、水の琅々誦すべきものならざる無し、世の歌學者は勿論苟も文學に志す者、一讀せざるべからざる珍書也

全一册紙皮金字入袖珍
美本紙數三百四十餘頁
賣價金貳拾錢郵税六錢

鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士合作(第十八版)

美文韻文 花紅葉

天に春花秋葉の文あり。人間亦文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の名文、夙に江湖に騷ぐ。其錦心繍腸、吐いて美文となり、發して歌文となれるもの凡そ數十篇集つて此冊子に在り。才華爛發、紙上珠を聯れ、地に擲たは金石の聲を發せんとす。洵に花紅葉を一時に見るの心地すべく明治文壇の奇觀たること言を俟たず。天下文を好むの士、願くは、一本を備へて讀誦に資せられんことを。

全一册總クロース袖珍
美本紙數四百二十餘頁
正價金參拾錢郵税六錢

發兌元 東京 博文館